

日本中東学会では2021年11月13日（土）に今年度の公開講演会を開催しました。
以下はその文字起こし記録です。

主旨：

世界的に猛威をふるうコロナ禍の中、出かけることが困難な日々が続いています。こうした時期には、歴史書を繙き、あるいは文学の世界に入らる中で、旅に出るといふ楽しみが、より貴重に感じられます。本講演会では、カイロ、バグダード、イスタンブール、テヘラン、エルサレムについて、その街並みや、起こった事件や出来事、人間模様について歴史学や文学の専門家ならではの視点からお話いただきます。過去と現在、空想と現実を行き来しつつ、中東の都市探訪を楽しんでいただければ幸いです。

詳細ウェブページ：

http://www.james1985.org/modules/meetings/index.php?content_id=3

プログラム

司会 後藤絵美（日本中東学会・理事）

開会の言葉・趣旨説明 粕谷元（日本中東学会・理事）

講演1 熊倉和歌子「寄進がつなく都市とひと——中世カイロの歴史建造物を歩く」

講演2 柳谷あゆみ「『バグダードのフランケンシュタイン』のバグダード」

講演3 澤井一彰「西から東から——食文化に見るイスタンブールの多文化共生」

講演4 藤元優子「望郷——小説に見る変わりゆくテヘラン」

講演5 白杵陽「聖地エルサレムの春祭り——預言者モーセ廟を巡って」

質疑応答

閉会の言葉 保坂修司（日本中東学会・会長）

主催

日本中東学会

後援

科研費基盤研究(A)イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究

（代表：長沢栄治，20H00085）

1. 開会の言葉・趣旨説明（粕谷元）

本日は、お忙しい中、日本中東学会の第28回公開講演会に、多数の皆様にご参加いただきまして、主催者一同、心よりお礼申し上げます。

オンライン講演会ということで、実際に皆様にお目にかかれないのは、寂しく、残念である一方で、オンラインだから参加した、参加できたという方もいらっしゃるかと推測します。その意味で、オンラインのメリットもあったらと思っています。

本講演会は、「科研費基盤研究(A)イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究」との共催です。代表者の長沢栄治先生をはじめとするイスラーム・ジェンダー学関係者の皆様に、この場を借りて深くお礼申し上げます。

現在日本では幸いにも新型コロナウイルスの感染は下火になっていますが、以前のように気楽に海外旅行に出かけるような状況には依然としてなっていません。中東の国々や諸都市を自由気ままに旅することができるようになるのは、まだしばらく先のようなようです。

とはいえ、このような時だからこそ、今回の日本中東学会公開講演会では、中東の諸都市探訪を疑似体験できるような企画を立ててみました。実際に出かけることが難しくても、私たちの精神や知的想像力は、時空を容易に超えることができるはずで。

時空を超えた探訪を皆様に今回疑似体験していただく都市は、カイロ、バグダード、イスタンブール、テヘラン、エルサレムの五都市で、それぞれの都市の歴史や文化に精通した五名の講演者の方々にお話しいただきます。いずれのお話しも、重層的・多面的な歴史、文化を持つ各都市の魅力と奥深さを再発見させてくれるような、あるいは現実の姿を浮き彫りにするようなお話しになるかと思えます。

本講演会の参加者の皆様の中には、いわゆる中東通の方々も少なくないと思いますが、そのような方でも、歴史学や文学のそれぞれの専門家の話を聞けば、改めて知り、学ぶことも少なくないはずで。

お一人の講演時間はそれほど長くないのですが、我々開催者も少々欲張って五名の講演者をお招きしたので、全体では多少長丁場になります。どうぞ気楽に、各講演をお楽しみいただき、可能なら最後までお付き合いいただければ誠に幸いです。

司会：粕谷さん、ありがとうございます。それではご講演に入りたいと思います。

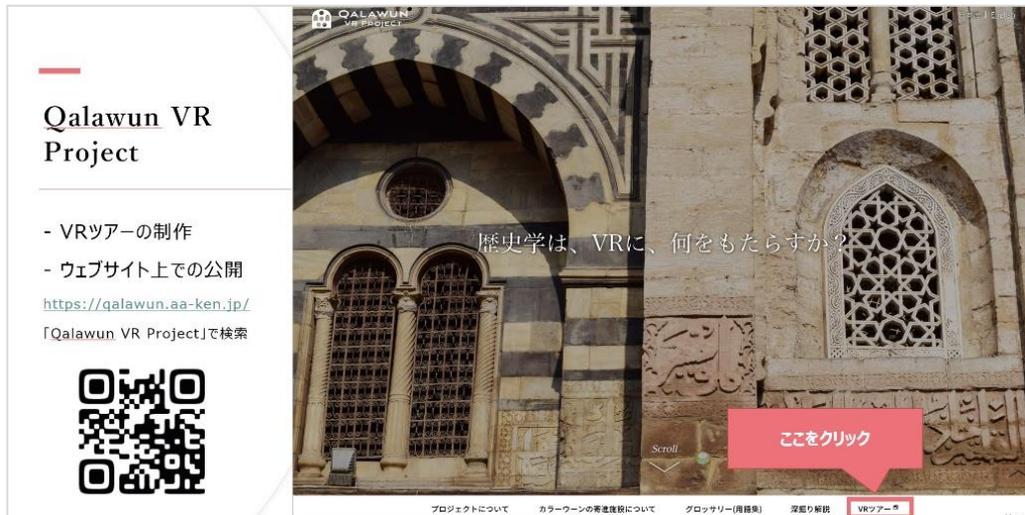
最初のご講演者は熊倉和歌子さんです。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所にお務めで、専門は中近世エジプト史、著書に『中世エジプトの土地制度とナイル灌漑』があります。緻密な歴史学的研究に加えて、最新のデジタル技術にも明るく、ヴァーチャル・リアリティの技術を用いたプロジェクトを運営されています。今日は「寄進がつなぐ都市とひと——中世カイロの歴史建造物を歩く」というタイトルでお話しいただきます。

講演1「寄進がつなぐ都市とひと——中世カイロの歴史建造物を歩く」(熊倉和歌子)

こんにちは。熊倉です。私は、現在、Qalawun VR Project というプロジェクトを通じて、遺跡などの空間を記録する新たな方法として、ヴァーチャル・リアリティ (VR) などの新しい技術の研究や教育への利用について考えています。

こちらのスライドの方に、プロジェクトサイトへのリンクとQRコードを貼っておきました。プロジェクトサイトのメニューバーの一番右にあるVRツアーのボタンをクリックすると、別ウィンドウでVRツアーの画面が開きます。アクセス可能な方は、こちらのVRツアーを自由にご覧いただければと思います。

<https://qalawun.aa-ken.jp/>



本日のお話の舞台は、このVRツアーが扱うカラーウーンの寄進施設です。これは、病院・マドラサ・創建者の墓廟からなる複合施設として、マムルーク朝の第8代の王であるカラーウーンによって13世紀末に創建されました。カラーウーンは、王としての絶対的な権威を築き、死後は彼の子孫が王位に就く「カラーウーン王朝」とも呼ばれる一族による支配体制を確立した人です。カイロには、数多くの歴史建造物が残されていますが、中でもカラーウーンが寄進した施設はマムルーク朝随一の壮麗な建築であると評されます。

また、この寄進施設はさまざまな役割を担いました。王朝の儀礼の場であり、知識を求める人々の交流の場でもありました。さらに、建築文化が集合する場でもあり、癒しと臨終の場でもありました。本日は、このような様々な場として使われたカラーウーンの寄進施設の内部を歩きながら、マムルーク朝の王都カイロにおける人々の営みを垣間みたいと思います。

カラーウーンが病院の建設場所として選んだのは、カイロの始まりの地、バイナル・カスラインでした。この地区は、カイロを建設したファーティマ朝カリフの王宮があった場所です。それから300年近く経過していたマムルーク朝時代には、その一角は貴族の邸宅となっていました。また、その向かい側には、かつてカラーウーンが仕えたアイユーブ朝の王サーリフが創建したサーヒーヤ学院がありました。カラーウーンは、かつて仕えた王の施設と向き合うように、自身の施設を建設しようと考えたのでした。

カラーウーンは、この施設を、ワクフと呼ばれるイスラームの寄進制度を通じて運営しました。ワクフというのは、寄進者が、所有する財産を売却・譲渡・相続する権利を放棄して、そこから上がる収益を慈善事業に充てる制度です。ワクフは、もともと、アラビア語で「停止」を意味する一般名詞で、所有権の移転を「停止」するところから、この語が寄進制度を表す用語となりました。

ワクフにおいて寄進されるものは、通常、持続的に収益を生み出すものでした。慈善事業というのは、例えば、モスク、マドラサ、病院、給水施設などといった公共施設の運営などがあげられます。カイロに

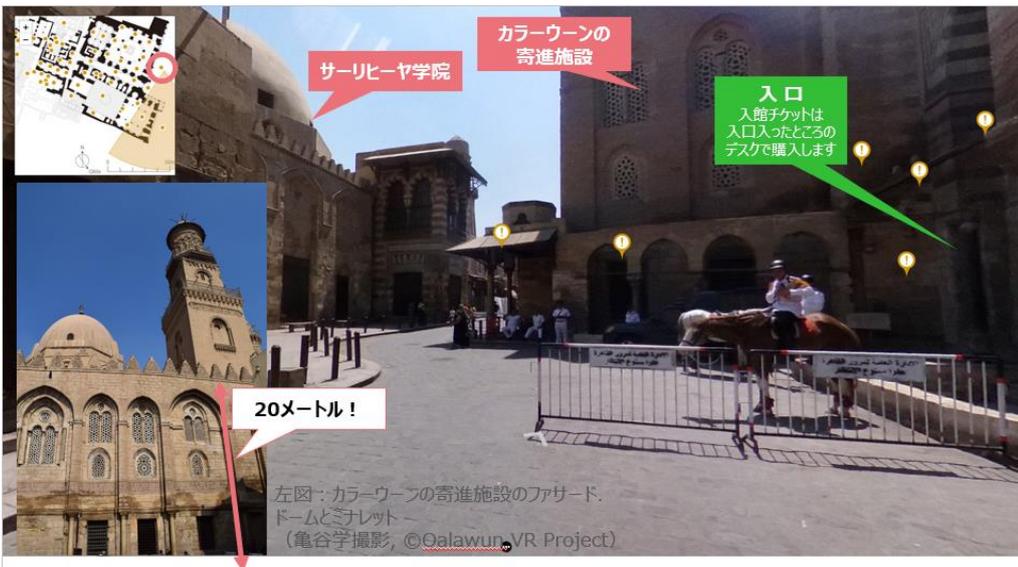
限らず中東の各地には、こうした施設が今日まで残っていますが、これらはワクフにより運営され、公共の福祉に寄与しました。

マムルーク朝時代のカイロでは、王をはじめとする支配者層によって盛んに寄進が行われ、多くの建造物が建てられました。イスラームは、弱者救済は善行とされるため、寄進を通じて公共の福祉に寄与することや弱者救済を実践することは、寄進者の信仰心を満たすことにつながったはずです。加えて、寄進を通じた公共施設の運営は、寄進者の善行が可視化されるため、支配者層にとっては、民衆の心をつかみ、政治的なアピールをするよい機会にもなったんですね。

それでは、いよいよカラーウーンの寄進施設のツアーを始めましょう。

スライド左上に示される平面図ではどの地点からどの方角を見ているかが示されますので、ご自身で操作されている方はこちらで位置関係をご確認ください。また、画面上のびっくりマークをクリックすると、プロジェクト・メンバーの一人でイスラーム建築がご専門の深見奈緒子先生による解説をご覧いただけます。びっくりマークは、頭上や足下など、思わぬところに隠れていることがありますので、上下左右に視点を動かしながらご覧いただければと思います。

みなさんに今ご覧いただいているのは、カラーウーンの寄進施設前の写真です。左奥に見えるのが、サーリヒーヤ学院です。通りを挟んで右側に見えるのが、カラーウーンの寄進施設になります。そのファサードの高さは20メートル！壮観です。早速入口から入っていきましょう。



入口に立って上を見上げると、入口上部のリンテルにはアラビア語の碑文が刻まれていることに気づきます。これには、この施設の建設が、カラーウーンによって命じられたこと、建設作業が1284年6月に開始され、翌年8月に完了したことが記されています。これほどの大規模な施設を、重機のない時代に約1年で完成させるのは至難の業です。事実、この突貫工事には、通行人も集められて建材運びを手伝わされたと伝えられています。

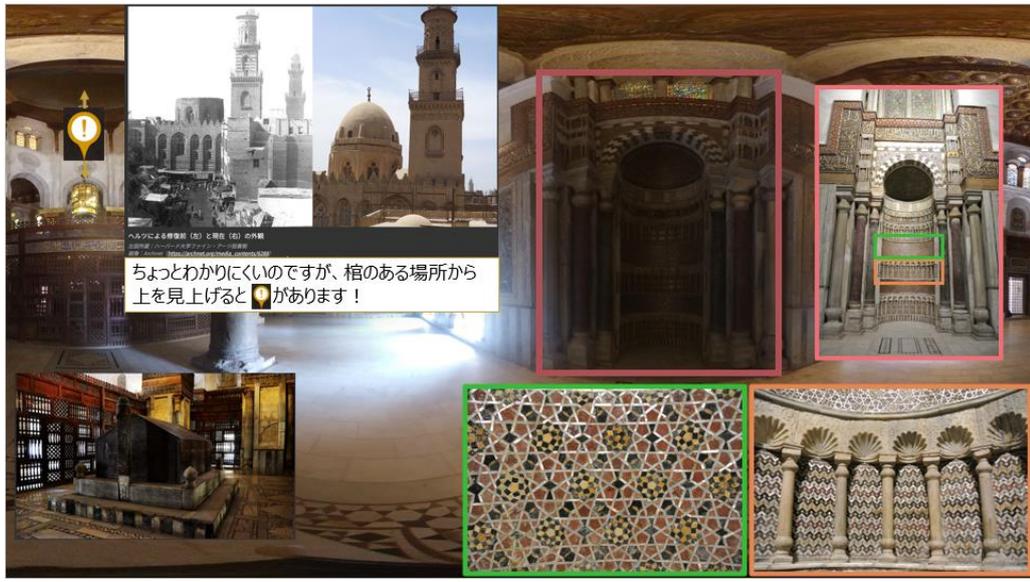
内部に進む前に、平面図を確認しておきましょう。こちらはVRツアーの左上に表示されている図と同じものです。この図の黄色の部分がカラーウーンとその子孫の墓廟、赤い部分はマドラサ、そしてその左

側に広がる緑色の部分が病院の敷地です。3つの施設は、長細い通廊を通じて行き来できるようになっています。まずは、多くの観光客が最初に訪れる墓廟に入ってみましょう。



こちらの墓廟の中央は、高さが31メートルあり、その頂点はドームに覆われています。現在のドームは20世紀初頭の修復によるものです。その真下には、空の棺が置かれていて、この地下にカラーウンが埋葬されていると考えられます。木製の格子壁に囲われたこの空間は、普段は入ることができない場所です。

墓廟には、壁面や天井の装飾など、数え切れないほどの見どころがありますが、特にこの壁のくぼんでいる部分の装飾は息を呑む美しさです。この壁のくぼみのことをミフラーブといいます。ミフラーブはメッカのカーバ神殿の方向を示しています。カラーウンの寄進施設には、もう1箇所、ミフラーブがありますので、是非探してみてください。それについては後ほどお話します。



この墓廟は、王朝儀礼の場でもありました。王朝の官職の叙任式はシタデルとも呼ばれている山の城塞で執り行われましたが、その後、任命を受けた人々は、カラーウンの寄進施設まで行進して、その墓前

で宣誓を行いました。カラーウーンの死後に王位についた彼の子孫たちは、王に奉仕する人々に、「カラーウーン王朝」の創始者の墓前で宣誓させることで、その一族による支配を揺るぎないものにしようとしたのでしょう。しかし、カラーウーン一族による支配は、100年ほど続いたのち、14世紀後半に起こったクーデターにより断絶し、このような慣行も廃止されました。

時代が下ると、墓室にはカラーウーンが纏っていたという衣服が置かれ、それに触れると病が治癒すると信じられ、多くの人々が参詣するようになったようです。王朝儀礼に使われていた場所が、民間信仰の場になり、現在は観光名所となっているというわけですが、使われ方は違えども長きにわたり意味のある場となっているのは、この空間が醸し出す荘厳さゆえだと思います。残念ながら、こればかりはヴァーチャルでは伝えきれないものです。是非とも、現地を訪れて実感していただければと思います。まだまだ名残惜しいですが、マドラサに移動しましょう。

マドラサは、通廊を挟んで南側の敷地です。ここでは、法学やクルアーンにかんする講義がひらかれていました。敷地の各辺を取り囲むようにしてイーワーンと呼ばれるホールがあります。敷地の北側には、マドラサの教師や学生のための寄宿舎があります。14世紀初頭には、50名の学生がこのマドラサに学び、彼らには奨学金と寄宿舎が提供されていたと伝えられています。

歴史資料から、カラーウーンのマドラサに寄宿していた人物についての具体的な情報は得られませんが、例えば、カラーウーンの寄進施設に隣接する形でカラーウーンの子が創建したナースイリーヤ学院の宿舎には、マムルーク朝を代表する文筆家であるヌワイリーが一時期住んでいました。彼は、エジプト南部からカイロに上京してきたので、宿舎の提供はありがたいものだったでしょう。カラーウーンの場合も、栄達を夢見て上京する人々に一時の住まいを提供したのではないかと思います。彼らはマドラサでの交流を通じて、キャリアアップに必要な知識やコネクションを得て巣立っていったのでしょう。



カラーウーンの子であるナスイル・ムハンマドが創建したナースイリーヤ学院
カラーウーン寄進施設の北側に隣接している

次にこのマドラサのもう一つの見どころである、最も大きなホールに移動しましょう。

ミフラーブを探していた方はここで答え合わせです。もう一つのミフラーブがあるのがこの礼拝室です。ここで注目したいのは、柱の装飾です。こちらの柱の柱頭は、植物模様のコリント式です。古代ギリシア美術の装飾様式として有名ですね。こちらの柱をご覧ください、舌のような模様があります。これは、古代エジプトの装飾です。これらの柱は、再利用された転用材です。このように、カラーウーンの寄進施設には、マドラサだけでなく、ほかの部屋においても、転用材が見つかります。

この施設の建設に際しては、ナイル中州のロード島にあった宮殿で使われていた建材を再利用したことが伝えられています。ですので、コリント式の柱や古代エジプトの柱は、ここで使われる以前、ロード島の宮殿で使われていたのかもしれませんが。そうすると、これらの建材は、再々利用、もしくは、もっといろいろな場所を巡り巡ってここに落ち着いた可能性があります。寄進を通じた大規模建築に、さまざまな時代の建材が集合したのも、長い石造建築文化を持つエジプトの歴史の重なりを表しています。

建材の再利用の事例は、カラーウーンの寄進施設以外にも見られます。詳しくは、プロジェクトサイトの「深掘り解説」をご覧ください。このなかに安岡義文先生が「カイロの街にみられる古代エジプトの建材再利用について」掘り下げてくださっています。イスラーム建築に再利用された建材の存在は、まだまだ知られていないものも多く、みなさんが第一発見者になるかもしれません！

そこで、カイロにあるほかのイスラーム建築を探訪したい方のために、もう一つ、私も制作に関わっているカイロのイスラーム建築データベースを紹介します。これは、深見奈緒子先生が蒐集されてきたカイロの歴史建造物の画像データベースです。カラーウーンの寄進施設を巡り終えた後に、こちらのデータベースで、ほかの歴史建造物も訪れると、イスラーム建築をより深く楽しむことができるのではないかと思います。

<https://islamic-architecture.aa-ken.jp>



さて、このあとは、この寄進施設の心臓部である病院に入って参りましょう。

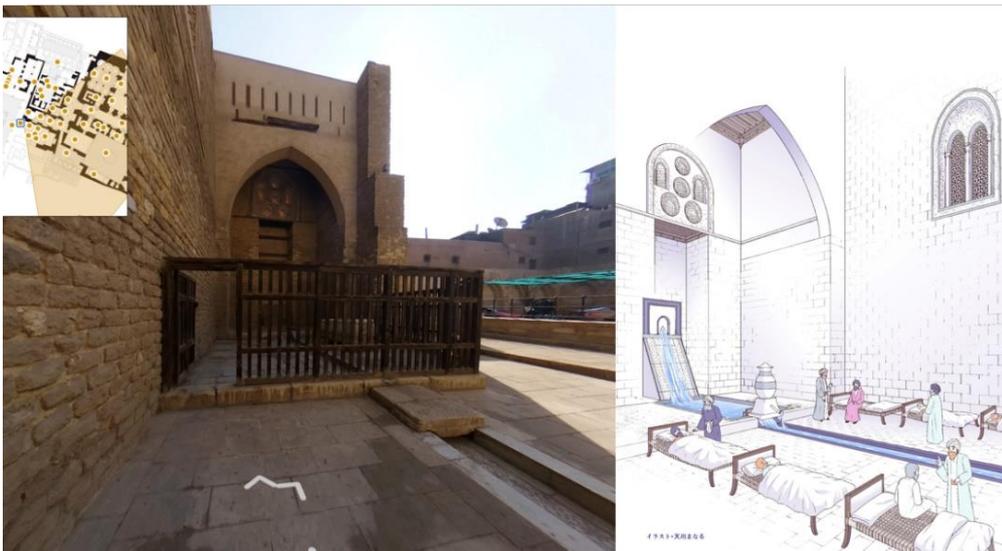
寄進の具体的な内容が記された寄進文書によると、創建当時、病院には内科、眼科、外科が置かれていました。また、現在で言うところの、看護師や、薬剤師も配備されていました。さらに、同病院の医師長は、医学教育を提供することが職務の一つとされ、医学の講義も行われていたことがわかります。実際、

先ほど登場した文筆家のヌワイリーは、この病院でひらかれた毒蛇の毒に効果的な血清をつくる講義に出席し、そのときの記録を自身が編纂した百科事典に残しています。

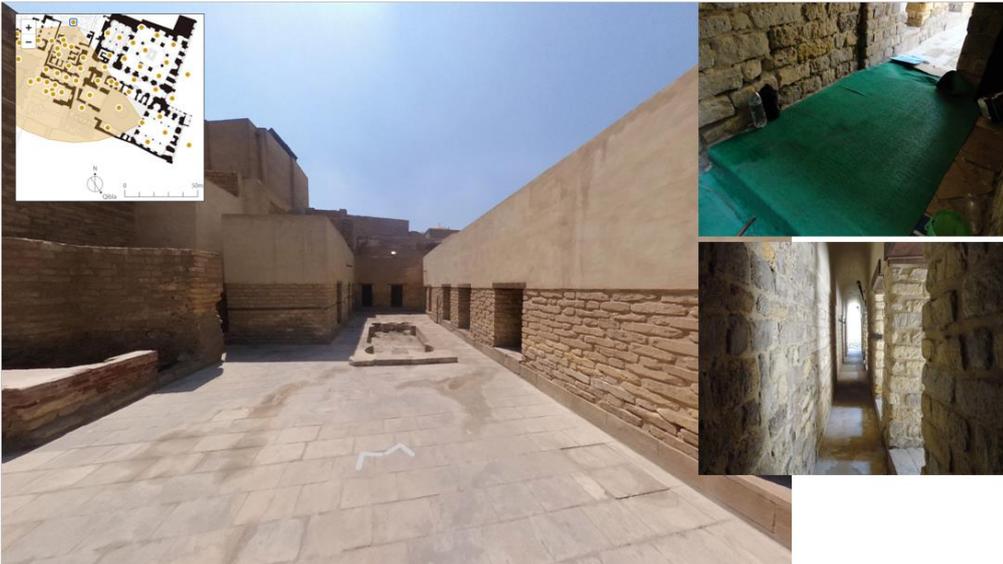
病院の敷地には、中庭を挟んで対面する二つのホールがあり、ホールの奥の壁にはシャディルバンと呼ばれる滝状装置があります。このスライドの右図はパレルモにあるジーザ宮殿のシャディルバンです。カラーウーンの方はほとんど原型を留めていませんがおそらくはこのような形であったろうと想像されます。当時は、壁から水が流れ出て、室内を流れていたのですね。このホールは回復期の男性患者の病棟として使われていたと考えられます。



こうした情報をもとに、プロジェクトでは、当時の様子をイラストで再現してみることにしました。こちらは漫画家の天川マナルさんに描いてもらった想像図です。水の流れる室内での療養は快適だったのではないのでしょうか。



こちらは少し場所を移りまして、病院の北側の敷地になります。ここは、男女別の個室病棟として使われていました。ご覧いただいている男性の個室病棟の内部にはすべての個室をまわることができる細い通廊が敷かれていまして、効率的に回診できる構造になっていたことがわかります。



カラーウーンの病院は、13世紀末の創建以降、この地域一帯の最先端の病院として、治療と医学教育に寄与しました。マムルーク朝時代の名士には、カラーウーンの病院で臨終のときを迎えた人も少なからずいます。それでは、1517年にマムルーク朝がオスマン朝に滅ぼされたあと、病院はどうなったのでしょうか？ 17世紀に書かれた旅行記などにカラーウーンの病院の素晴らしさが記され、中東随一の病院という位置は持続していたようです。しかし、時代は下って、19世紀初頭のナポレオン軍占領時の調査報告には、病院に収容されている患者は劣悪な環境におかれ、十分な医療サービスを受けていないことが報告されています。さらにそこから約80年後に出版された旅行ガイドには、「その大部分が廃墟と化し、銅細工師や鋳掛屋の作業場として使われている」と書かれています。

ちょうどこの頃、つまり19世紀後半に、病院の再建事業が開始されました。カラーウーンの病院には新たな病棟が建設され、1915年には、リニューアルオープンしましたが、そのときに、再建事業を任せたアウフ親子の専門であった眼科に特化した病院となりました。

そして今。カラーウーン眼科クリニックは、21世紀に入った現在も診療を続けています、病院跡を訪れると、フェンスの向こうでは、白衣を着た医師が患者と話す様子や、診察を待つ人々の姿などが見られます。もちろん、身なりは違えども、タイムスリップした錯覚に陥らなくもありません。現在のクリニックも、Googleの口コミを見ると、なかなかの評判です。きっと創建者のカラーウーンも、自身が建てた病院が、700年以上の時を経てなお存続し、カイロの人々を癒す場となっていることにさぞかし満足していることでしょう。

司会：熊倉さん、ありがとうございました。

地図と写真、映像、イラストが一体になってまるで、熊倉さんをツアーガイドに、本当にカラーウーンの寄進施設を訪れているような気持ちになりました。皆さん、こちらのリンクから、ご自身でも訪問することが可能ですので、ぜひお楽しみください。(<https://qalawun.aa-ken.jp/>)

次のご講演者は柳谷あゆみさんです。柳谷さんは公益財団法人東洋文庫研究員、上智大学アジア文化研究所共同研究員をされています。専門は12世紀から13世紀にかけてイラクとシリアを支配したザンギー朝の「政治史」ですが、現代のアラブ文学の翻訳も多数手掛けておられます。最近、話題になったのが、本日お話いただくアフマド・サアダーウィー著『バグダードのフランケンシュタイン』です。

講演2 『バグダードのフランケンシュタイン』のバグダード（柳谷あゆみ）

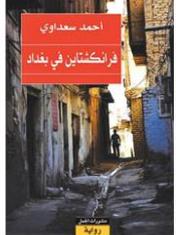
今回の講演者の中で、私は唯一、実は「行ったことがない」都市の話をするのですが、昨年翻訳しました『バグダードのフランケンシュタイン』というイラクの小説についてお話しさせていただきます。この小説は、2005年バグダードを実に鮮やかに、かつフィクションならではの豊かさをこめて描いたものです。非常に情報量が多く、喚起されるところの多い作品だと思います。今日、私はこの小説とそこに描かれているバグダードについてお話させていただきます。

まずこの『バグダードのフランケンシュタイン』について紹介します。この作品はイラクの作家アフマド・サアダーウィーが2013年に執筆した小説で、イラク人作家の小説としては初めてアラブのブッカー賞と呼ばれている、アラブ小説国際賞を受賞しています。翻訳も約20か国で出ていまして、中でもジョナサン・ライトが手掛けた英訳はアーサー・C・クラーク賞とブッカー国際賞の最終候補まで残りました。

サアダーウィー 『バグダードのフランケンシュタイン』 فرانكشتاين في بغداد

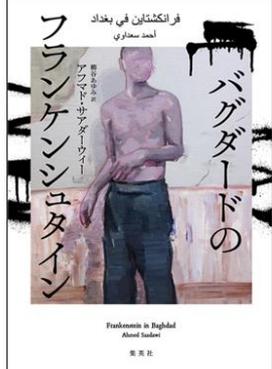


作者 アフマド・サアダーウィー
：1973年、バグダード生。長編第3作『バグダードのフランケンシュタイン』（2013年）で2014年アラブ小説国際賞を受賞。
英訳はブッカー国際賞及びアーサー・C・クラーク賞の最終候補に。



日本語訳『バグダードのフランケンシュタイン』（柳谷あゆみ訳。集英社、2020年）

←アラビア語原書



Frankenstein in Baghdad
Ahmad Saadawi
集英社

アーサー・C・クラーク賞最終候補ということで、この小説はまずSF小説として評価されているわけですが、そして、もちろん最初の設定などは多分にSF的なのですが、全体を通してみると、この小説はSF小説であると同時に、ひたすらバグダードという都市と、イラクという国、そしてその住民を描いたバグダード小説、イラク小説であると思います。

小説の舞台は2005年のバグダードです。2005年という年は、サッダーム・フサイン政権を、アメリカを中心とする連合軍が打倒した後、ようやくイラクに暫定政権が成立した年で、政情不安から爆破テロが頻発していた時期にあたります。

この小説の発端は、一人の古物屋が、爆破テロの犠牲者の身体の一部を一体分寄せ集め、誰でもない、寄せ集めの遺体「名無しさん」を作り上げたことです。彼は、無二の親友を爆破テロで失ったのですが、ばらばらになった遺体の扱われ方に衝撃を受け、肉塊としてではなく、死者としての尊厳を取り戻すためにこういう行動に出たのです。

ところが翌日「名無しさん」は姿を消してしまいます。そして、その後、この怪物「名無しさん」による奇妙な連続殺人が始まる、そういうあらすじです。

寄せ集めの死者による連続殺人と言うモチーフは、SFの古典、メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』を下敷きとしていますので、この小説は確かにSF小説ではあります。ですが、先ほども言いましたように、この小説は「名無しさん」の出現を軸として、2005年のバグダード、そしてその住民を描いた群像劇、都市小説であるといえます。そこで、ここでは小説に描写されている、2005年のバグダードの状況を見ていきたいと思います。

小説はバグダード中心部での自爆テロのシーンから始まります。爆破テロが頻発している事態が、このシーンや、その後に報道官が「一日に爆破テロが15件しか発生しなかった」と手柄顔で発表する場面からも明瞭に読み取れます。

ここから浮かび上がるのは、バグダードに住んでいる限り、いつでも理不尽な死を遂げかねないという、住民全般が感じている不安と恐怖です。実際、この年にはこの恐怖故に発生した「アインマ橋事故」という、象徴的な死亡事故がありました。祭礼日に、市内のアインマ橋を渡っていた群衆のなかに、自爆テロ犯がいるという噂が流れ、パニック状態になった人々が圧死や溺死をとげたという痛ましい事故です。小説でもこの事故は取り上げられており、登場人物の一人が為政者側はこの恐怖に対処すべきだと強く訴えています。

このように、漠然とした死の恐怖は身近にあるわけですが、他方でこの作品は政情不安のなかでも確かに人々が普段の生活を続けている、その様子を実に具体的に、丁寧に描いています。個人的に特に面白く読んだのは、実はこうした生活のディテールです。バグダードで誰が何を毎日食べて、どのような車に乗って、どんなお酒を飲んでいるか、非常に詳しく出てきます。本当に細かく描写されているので、そこから人物の暮らしぶりや性格も見えてきます。また、私は留学先がシリアだったので、隣国イラクでは朝食のメニューまでだいぶ違うということをこの小説から知りました。バグダードは市内にティグリス川が流れているのですが、その河畔の夜景の美しさ、何気ないんですけど、こういう描写も強く印象に残っています。そして、市井の、本当に普通に暮らそうとしている人間の存在を実感することができます。爆破テロが頻発する非常事態と、日常生活の愉しみが同時に存在している。この作品に繰り返し見られるのは、一見、正反対に見えるものが混在しているという、混沌の構図です。

さて、この社会に忽然と「名無しさん」は出現します。死体の寄せ集めでできている「名無しさん」は、死ぬことはありません。しかし、身体の部位が腐敗して崩落してしまうので、絶えずほかの誰かのパーツで付け替えていかないとはいけません。寄せ集めである彼は常に流動的で、顔も変わりますし、特定の誰かにはなりえません。

本来、誰でもないはずの「名無しさん」ですが、彼に遭遇しその存在を知った人は、自分が求めているもののイメージを彼に投影していくのです。

古物屋が「名無しさん」を作り上げたとき、彼にとって「名無しさん」とは「尊厳を取り戻した遺体」でした。彼の心中にあったのは、親友を爆破テロで失った悲嘆と行き場のない怒りです。また「名無しさん」が最初に出会ったのは、20年以上前にイラン・イラク戦争に出征し戻らなかった息子を忘れられないキリスト教徒の老婆なのですが、彼女は「名無しさん」をその息子の名で呼びます。

翻訳をしていて、胸を衝かれたのは、この二人の悲嘆と怒りです。一人一人の死者に人生があり、彼らの死にさらに多くの人の悲嘆があったことに気づかされました。

「名無しさん」が最初に触れたのは、この悲嘆と怒りです。その結果、彼は自分の身体を構成するすべての死者の報復のために、死をもたらした「罪人」への殺人を開始します。

死なない殺人者となった「名無しさん」の存在は、バグダード市民が抱える、漠然とした恐怖と不安に形を与えます。それぞれが疑心暗鬼に陥り、自らの敵の存在を彼に見出していくことになります。

また、その一方で、この寄せ集めの怪物に対して、理想的なイラクの姿を見出す支持者も現れます。ここには、イラクと言う国が、第一次世界大戦後、イギリスが委任統治の受任国になるために人工的に寄せ集めて作った国として始まり、アイデンティティが不安定な状態にあるという歴史的経緯が絡んでいます。

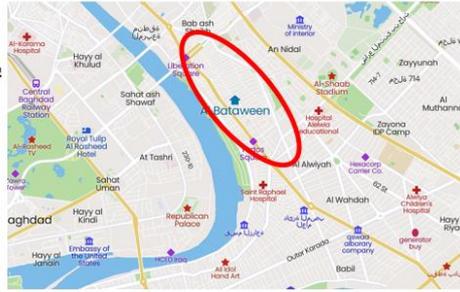
そして「名無しさん」自身、絶えず自分の身体のパーツを入れ替えていくうちに、変化していったことが読み取れます。彼と言う存在を、一貫する要素はどんどん薄れて行って、寄せ集めとしての存在感が高まっていくわけです。彼の殺人も、徐々に罪人への報復から、彼自身の生存のための殺人になっていく。ついに彼は「完全な形で、純粋に罪なき者はいない。そして完全なる罪人もいない」という気づきを得ます。

ここで、作品の舞台となった地区を見たいと思います。バグダード中心部のバターウィーン地区です。ここもまた異質な要素が混在する地区です。バターウィーン地区は、20世紀初頭に建てられた伝統的な家屋が多く残っているのですが、住民の高齢化や移住によって管理が行き届かず、荒廃したり、リノベーションによってホテルに転用されたり、また文化財として政府の保護の対象となったりしています。小説の最後の方では、この地区の地中からアッバース朝期の遺構が出現します。遠い過去と21世紀の現在が、日常生活を営む空間に混在していることがわかります。

地区の住民もまた雑多そのもので、イスラーム教徒もキリスト教徒もお隣さんとして暮らしています。ある家からは、クルアーンの章句を貼りつけた壁の向こうから聖母マリア像が現れ、さらに奥にユダヤ教徒のアイコンが出てきます。

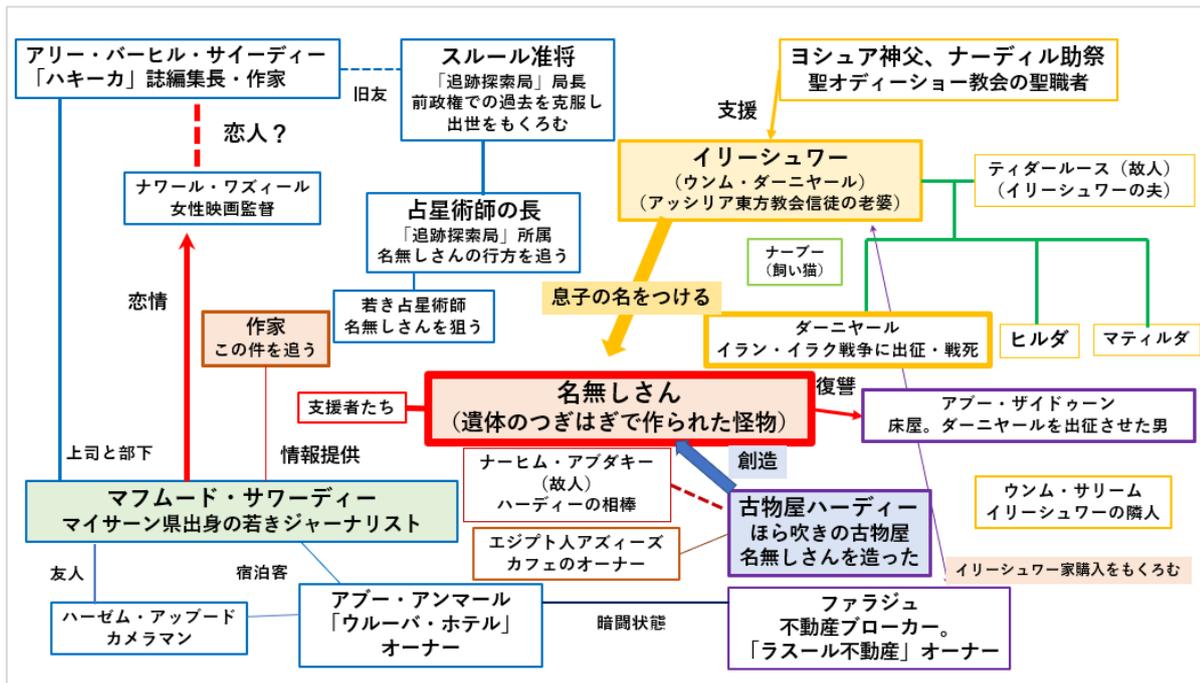
【舞台】 バターウィーン地区：歴史性と多様性

ティグリス川東岸・市内中心部
伝統的家屋群：保存、崩落、解体、開発
 中庭、吹き抜け、マシュラビヤ窓（格子や幾何学模様を組み合わせた木製の窓）
歴史の深さ：アッバース朝期の遺構が地中から現れる



住民の多様性：
 クルアーンの一節を貼りつけていた壁を壊すと、
 聖母マリア像が現れ、その奥からさらにユダヤ教の
 イコンが現れる

この地区で「名無しさん」に関わっていく、小説の登場人物は、まあとにかく数が多いのですが、宗教も、出自も、年齢もばらばらな人たちです。他の地方や外国からの移住者も多い。一応、読者の皆さんの役に立つと良いかと思って、人物相関図を作成して自分のツイッターに掲載しています。



これらの雑多な住民について本作は「よそ者が入り込んで、長い年月をかけ互いに組み合わせるように堆積して、『地区』はできあがる」(33頁)というとても適切な一文で説明しています。そして、最終的には主要な登場人物の大半がバグダードを去っていきます。移住者が集まっては去っていく、バグダードのめまぐるしい変化がここに示されています。

駆け足で紹介しましたが、ここまででお気づきの方もいるかもしれません。

「寄せ集め」として生まれ、次々と顔が変わり、過去の記憶と結びつきながら、常に新しく、死なずに生き続ける「名無しさん」は、まさに現在のイラク、そしてバグダードと重なる存在なのです。彼が振りまく理不尽な死への恐怖は、政情不安なバグダードが包含する恐怖と同一です。

「名無しさん」が、自分を息子のように扱ってくれる老婆の言葉に、そうありたい、と願うシーンがあります。それは「平穏な」バグダード市民が日常生活で味わう「中庭で星を見ながら眠る」というささやかな幸せを経験することです。しかし「名無しさん」はその人生を得られない。ここに、2005年以降のバグダードの幸いと苦難の双方が現れていると私は思います。

私の報告は以上です。どうもありがとうございました。

司会：柳谷さん、ありがとうございました。

『バグダードのフランケンシュタイン』をすでに読まれた方も、これから読んでみようと思われた方もいらっしゃるかと思いますが、今日のお話をうかがって、バグダードの情景や人々の様子や心情を知るための「読みどころ」がおわかりになったと思います。こちらも続きの旅は、小説を通してということで皆さまどうぞお楽しみください。

三人目のご講演者は、澤井一彰（さわいかずあき）さんです。関西大学文学部、文化共生学専修教授をお務めで、専門はオスマン朝、中でもイスタンブールの社会経済史、比較食文化史です。著書に『オスマン朝の食糧危機と穀物供給』があります。今日は「西から東から一食文化に見るイスタンブールの多文化共生」と題してお話いただきます。イスタンブールに留学中も、私は当時カイロに留学していたのですが、食通で名高かった澤井さんから、今日は過去から現在までさまざまなお話を伺えるのではと期待しています。

講演3 「西から東から一食文化に見るイスタンブールの多文化共生」（澤井一彰）

関西大学の澤井一彰と申します。私は食通ではなく、あくまで食道楽で、ただ飲み食いが好きなだけの人間なものですから、今日はそういった内容のお話をさせていただきます。

今回の発表では多少副題を変更させていただきました。単に歴史の話をするよりも、コロナで現地行けないことで鬱積している不満やストレスをどうにか発散できるように、ヴァーチャルでイスタンブールの飲み屋街に繰り出した、という体でお話をしたいと思います。

※冒頭で Yeni Rakı の以下の動画のご紹介がありました

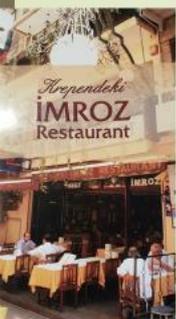
<https://www.youtube.com/watch?v=eYgIw9XA4I0>

今ご覧いただいたのは、イエニラクというブランドのお酒を作っているメーカーのCMです。お分かりになったかと思いますが、トルコの各地を繋ぐ形で撮影して、それをひとつの曲にのせて編集したものです。このCMに登場したのは非常に多様な人々（目の色、髪の色、肌の色…）、楽器、料理でした。これが、現在のトルコの多文化や多様性を象徴していると思われます。

こうしてトルコ各地から人が集まって住んでいるのが、現在のトルコ共和国最大の都市であるイスタンブールという街です。私自身も長らく留学しており、コロナ前までは定期的に訪れていました。観光パンフレットやメディアでは、例えば「アジアとヨーロッパの架け橋」「東西文明の十字路」などと紹介されています。これはともすると、西からやってきたものが東に抜ける、あるいは東のものが西に通り過ぎる、というイメージを与える可能性があります。ですが、通り過ぎる際にそこに落としていくものやそこに留まって住んでいる人もいます。その場所の食文化を見ながら、特に一般的なレストランではなくてお酒を飲む場所を実際に訪れた体でみることで、そこから見える多様性や多文化共生についてお話ししたいと思います。

居酒屋のことは、トルコ語でメイハーネと言います。メイハーネという言葉自体が非常に不思議で、「メイ」はペルシア語でワインを意味します。「ハーネ」は場所や建物という意味です。つまり直訳すると「メイハーネ」でワインハウスの意味になりますが、この場で提供しているものは必ずしもワインに限らないので（現在ではワインはむしろ少数派）、私は「居酒屋」と訳しています。人口の99%がムスリムと言われているトルコにおいてメイハーネの文化がある理由として、ひとつはよく言われることで、トルコ共和国の前身であるオスマン帝国（c1300-1922年）における多文化共生の伝統を引き継いでいるからというものです。当時、都市人口の過半数を非ムスリムが占めていました。その人たち（キリスト教徒やユダヤ教徒）の飲酒文化が温存されている、ということです。私が足繁く訪れていたネヴィザーデ通りにあったイムロズ・レストランは、ダーダネルス海峡の出口付近にあるギョクチェアダ（旧イムロズ島）島出身のオーナー（ギリシャ系トルコ人）が経営されていましたが、オーナーの死後はビジネスパートナーのトルコ人が経営していました。現在、メイハーネのほとんどはトルコ人が経営しています。

飲酒はイスラームでは禁忌であることはよく知られているので、飲まないのかという話になりますが、現在のトルコでは飲もうと思えば飲めるという状況です。オスマン帝国時代の飲酒については拙論をご覧ください（澤井一彰「16世紀後半のイスタンブールにおける飲酒行為と「禁酒令」」『東洋史研究』79-4, 2021年）。



メイハーネと飲酒文化

- **イスラームの国の居酒屋（メイハーネ）！？**
オスマン帝国（c.1300-1922年）と多文化共生の伝統
 都市人口の過半数を**非ムスリム**が占める
 ⇒キリスト教徒やユダヤ教徒の飲酒文化が温存される
ネヴィザーデ通りとイムロズ・レストランの思い出
- **ムスリムは飲まないのか？**
 澤井一彰「16世紀後半のイスタンブールにおける
 飲酒行為と「禁酒令」」『東洋史研究』79-4、2021年
世俗主義国家としてのトルコ共和国（1923年～）
 ⇒**専売法**の施行（1926～2008年）
 専売会社を通じて、国家が酒の生産と販売を管理





現在のトルコ共和国は世俗主義国家なので、お酒を飲むことも、信教の自由も同時に認められていま

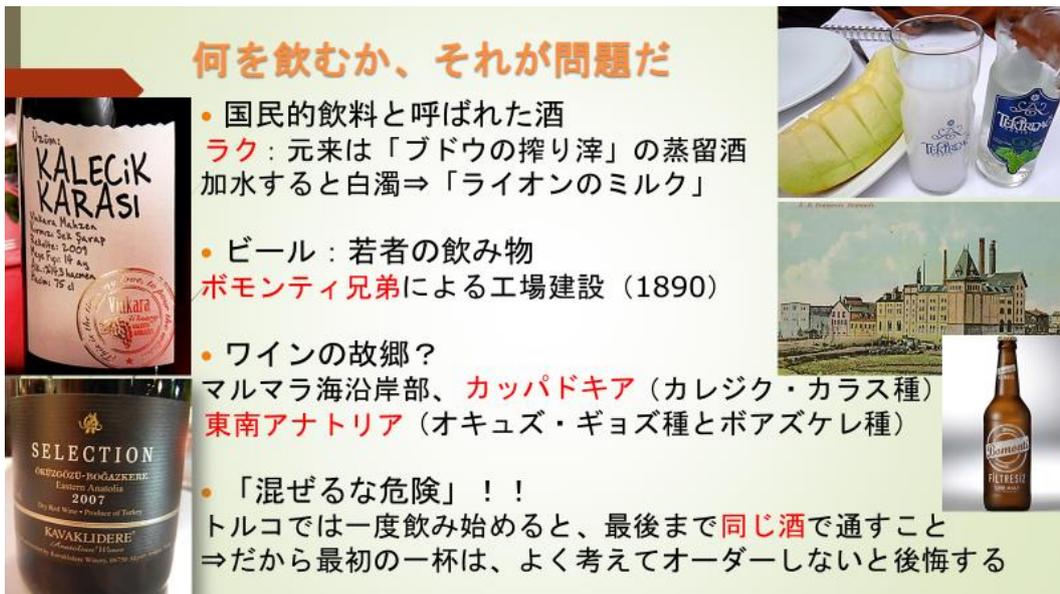
す。1926年から2008年までトルコには専売法が施行されており、専売公社を通じて国家が酒の生産と販売を管理していました。つまり、国家が酒を生産して流通させていたという歴史があります。建国の父・アタテュルクもラクというお酒を手にしている写真が残っていて、このお酒をととてもよく好んだというエピソードがあります。

ここからは皆さんと共にイスタンブールの居酒屋に繰り出したということでお話を進めていきます。

まず、お作法として「何を飲むか、それが問題だ」ということです。トルコではお酒を混ぜる、チャンポンすることを非常に嫌います。ですので、席に着いた時に「今日は何を飲もうか」ということをけっこう真剣に考えないとのちに後悔することになります。チャンポンを嫌う理由は悪酔いするからなどが考えられますが、この点はしょっちゅう注意されるほどトルコの人たちはこのことにこだわっています。

トルコの居酒屋で一番飲まれているものはラクというお酒です。これはアラビア語のアラックに由来しています。元来はブドウの搾り滓を原料にした蒸留酒で、イタリア特産のグラッパに似ていますが、アニスという香料で風味付けするので独特の香りと甘みが残ります。無色透明ですが水を入れると白く濁るので「ライオンのミルク」と呼ばれることもあります。それ以外にビールもあります。居酒屋にいてビールをずっと飲んで居座っている人はあまりいません。ビールは若者の飲み物、あるいは政治的に左派の人たちが飲むものというイメージができています。歴史的に見ても、他のアルコール飲料よりは新しく、1890年にスイス人のボモンティ兄弟が工場を作ったことが始まりです。現在、この工場は一部だけ残して解体されていますが、ブランドとして残っています。

ラク、ビールの他にはワインがあります。ワインはこの中で一番飲まれることが少ないです。キリスト教徒やユダヤ教徒が好んで飲んでいたことが理由にあげられるかと思います。例えばアルコール中毒の人を「シャラブチュ（ワイン好き）」と呼ぶように、ワインにはラクやビールとは異なったネガティブなイメージが付きまっています。かつては質もあまりよくありませんでしたが、最近は質が向上して、マルマラ海沿岸部、カッパドキア地方、あるいは東南アナトリアなどでトルコの土着品種からワインが作られています。これらのお酒から一つを選んだら、最後まで同じ酒で通すことがメイハーネにおける一つの流儀になります。



何を飲むか、それが問題だ

- 国民的飲料と呼ばれた酒
ラク：元来は「ブドウの搾り滓」の蒸留酒
加水すると白濁⇒「ライオンのミルク」
- ビール：若者の飲み物
ボモンティ兄弟による工場建設（1890）
- ワインの故郷？
マルマラ海沿岸部、カッパドキア（カレジク・カラス種）
東南アナトリア（オキュズ・ギョズ種とポアズケレ種）
- 「混ぜるな危険」！！
トルコでは一度飲み始めると、最後まで**同じ酒**で通すこと
⇒だから**最初の一杯は、よく考えてオーダーしないと後悔する**

はじめに飲み物を頼み、その次に注文するものは冷たい前菜です。これは大きな盆で運んでくれるので、言葉がわからなくても指差して注文することができます。冷菜はメゼといい、これはマザ（味）というペルシア語に由来します。スペインのタパスのように小皿にいろいろな味があり、多くの場合はオリーブオイルで軽く煮た野菜です。いろいろな文化が混ざっているところがトルコ料理の面白さや美味しさだと思うので、なかなか「トルコらしい」メニューを挙げることは難しいですが、あえて紹介するとすればアジュル・エズメ（トルコ語で「辛いペースト」の意味）で、これはトマト、玉葱、キュウリをみじん切りにしてペースト状にしたものです。もうひとつ、パトゥルジャン・ソスル（パトゥルジャンはペルシア語由来でソスルはフランス語由来）という揚げナスのトマトソース煮などもあります。

内陸アジアや中央アジアの伝統を感じられるものは、ヨーグルトを使った冷菜です。ハイダリ（乾燥ミント入りヨーグルト）やセミズオト（スベリヒユとヨーグルト）などがあります。

その他、魚介類を用いた冷菜もあります。チュロズ（干しサバの酢漬け）やカリデス・サラタス（エビの冷製）があります。これらは全てギリシア語由来で、これもキリスト教徒の文化の影響ではないかと思えます。

まずは冷たい前菜から：居酒屋の「陰の主演」

- 多種多様な前菜
- 大盆で運ばれてくる **メゼ**（冷菜）
- オリーブオイル**で軽く煮た野菜
- アジュル・エズメ（辛いペースト：トマト、玉葱、キュウリ）
- パトゥルジャン・ソスル（揚げナスのトマトソース煮）

- **ヨーグルト**を使った冷菜
- ハイダリ（乾燥ミント入りヨーグルト）
- セミズオト（スベリヒユとヨーグルト）

- **魚介類**を用いた冷菜
- チュロズ（サバ干しの酢漬け）
- カリデス・サラタス（エビの冷製）





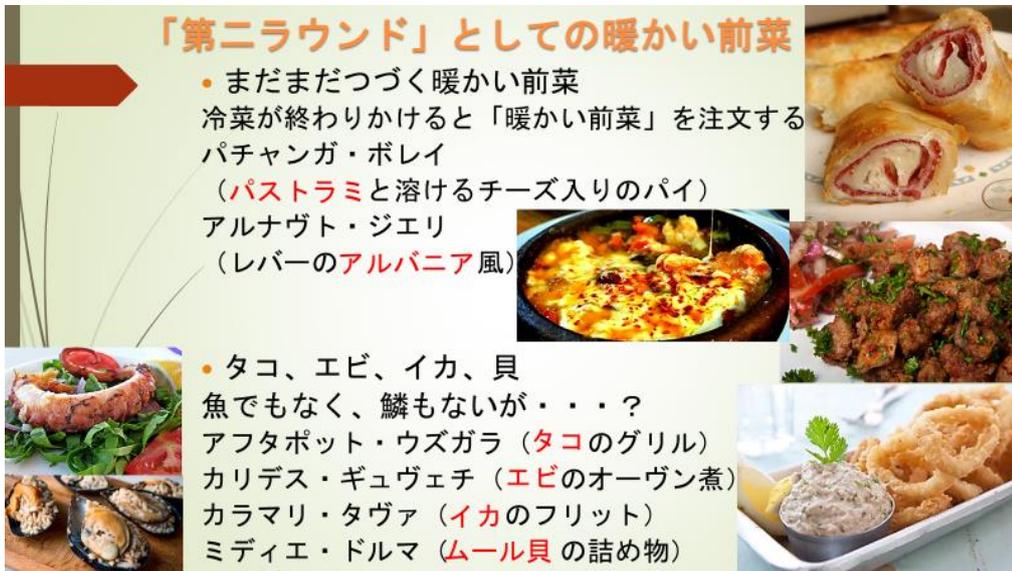


冷たいものが終わると、さらに温かい前菜が始まります。例えばパチャンガ・ボレイというパストラミと溶けるチーズ入りのパイや、アルナウト・ジエリというレバーのアルバニア風（おそらくアルバニア人が西からやってきて伝えた、レバーをピリ辛に炒め煮したもの）があります。このあたりになると、もはや温かい前菜なのかメインなのか分からなくなりますが、メインは基本的に焼くか揚げるかした魚が多いです。代表的なものにアフタポット・ウズガラ（タコのグリル）、カリデス・ギュヴェチ（エビのオーブン煮）、カラマリ・タヴァ（イカのフリット）、ミディエ・ドルマ（ムール貝の詰め物）などがあります。一番特徴的なのはミディエ・ドルマ（ムール貝の詰め物）で、これはアルメニア系の食べ物とされています。以上の、タコ、エビ、イカ、ムール貝のいずれも厳密に言うと魚ではなく鱗もありません。ゆえに、一番厳しいルールを適用すると、これはハラールではないと考える人もいるかもしれません。ですが、こうしたものをトルコの人々が好んで食べているということが、近隣の地域との長い交流の歴史の結果と

いえるのかもしれませんが。以上がメインですが、色とりどりの料理にお腹がいっぱいになり、メインが食べられなくなることも少なくありません。ですが、その場合でも怒られるということはなく、メインをとばしてデザートに行くこともあります。

「第二ラウンド」としての暖かい前菜

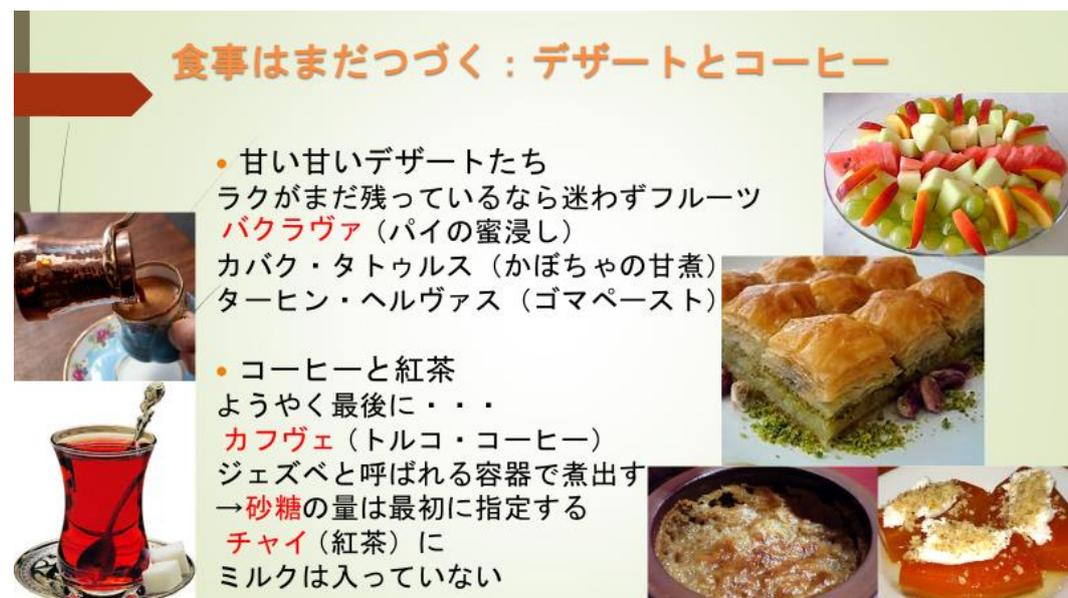
- まだまだつづく暖かい前菜
 冷菜が終わりかけると「暖かい前菜」を注文する
 パチャンガ・ボレイ
 (パストラミと溶けるチーズ入りのパイ)
 アルナウト・ジエリ
 (レバーのアルパニア風)
- タコ、エビ、イカ、貝
 魚でもなく、鱗もないが・・・?
 アフタポット・ウズガラ (タコのグリル)
 カリデス・ギュヴェチ (エビのオーヴン煮)
 カラマリ・タヴァ (イカのフリット)
 ミディエ・ドルマ (ムール貝の詰め物)



もしラクをボトルで注文していて、デザートまでにラクが残っていたら、フルーツの盛り合わせを注文してラクを飲み終えるまでおしゃべりと共に食事を楽しみます。トルコのデザートは日本人にとっては甘すぎるので、ラクとデザートと一緒に食べることはお勧めしません。トルコのデザートにバクラヴァというパイの蜜浸しがあります。この語源はわかっていませんが、中東全域でよく食べられているお菓子です。その他、カバク・タトゥルス (かぼちゃの甘煮) やターヒン・ヘルヴァス (ゴマペースト) などがあります。

食事はまだつづく：デザートとコーヒー

- 甘い甘いデザートたち
 ラクがまだ残っているなら迷わずフルーツ
 バクラヴァ (パイの蜜浸し)
 カバク・タトゥルス (かぼちゃの甘煮)
 ターヒン・ヘルヴァス (ゴマペースト)
- コーヒーと紅茶
 ようやく最後に・・・
 カフヴェ (トルコ・コーヒー)
 ジェズベと呼ばれる容器で煮出す
 →砂糖の量は最初に指定する
 チャイ (紅茶) に
 ミルクは入っていない



ようやく最後に、コーヒーか紅茶が運ばれてきます。コーヒーはたいていの場合カフヴェというトルコ・コーヒーで、ジェズベとよばれる銅製の容器で煮だします。直接カップに注ぐため底に澱が溜まりま

すので、上澄みだけを飲みます。煮だす時に直接砂糖を入れるので、あらかじめ砂糖の量も指定しておきます。あとから調整できないので、量を間違えると後悔します。我々日本人が注文する場合には砂糖を少な目をお願いするのが良いと思います。紅茶はチャイといい、インドのチャイとは異なりミルクは入っていません。

ここまで一通りお酒と料理を楽しむと、すでに真夜中になっていることがほとんどです。このように、様々な文化が一つに集まるのがトルコ料理の、あるいはトルコの居酒屋の魅力であり多様性であると思います。私の話は以上です。どうもありがとうございました。

司会：澤井さん、ありがとうございました。これからちょっと、食べに行きたいという気持ちになりました。居酒屋文化も懐かしく思われた方もいらっしゃるのではと思います。お酒の種類、居酒屋での作法など、ためになる情報も多かったです。個人的には、熱い紅茶とバクラワがほしくなりました。

ここまで、カイロ、バグダード、イスタンブールとめぐってきましたが、次にテヘランのお話しをいただきたいと思います。ご講演者は藤元優子（ふじもとゆうこ）さんです。大阪大学言語文化研究科教授、専門はイラン現代文学、主に女性作家の小説を扱ってこられました。訳書に『天空の家——イラン女性作家選』（段々社、2014年）、『ゾヤ・ピールザード選集 復活祭前日』（大同生命国際文化基金、2019年）などがあります。今日は「望郷—小説に見る変わりゆくテヘラン」というタイトルでお話いただきます。

講演4 「望郷—小説に見る変わりゆくテヘラン」（藤元優子）

ただいまご紹介に与りました藤元です。私はイランの現代文学、とくに小説を研究対象として参りました。イランの現代小説は、1921年がその起点だとされているので、今年で丁度百周年なのですが、その中でも、私の主な研究対象は1980年代以降の女性作家の作品です。本日は、「小説に見る変わりゆくテヘラン」などという大きな副題をつけましたが、今回主に取り上げる小説も、ここ2、30年の間に発表された二つの作品で、日本語訳がある、またはもうすぐ出る、というものを選びました。

さて、「中東の都市探訪」という大きなテーマの下、テヘランと小説の関わりを考えるために、まずテヘランという町の特徴をお話ししておきたいと思います。とくに、この町の地理的、歴史的特色を色濃く反映している「分断」の問題に注目しました。「望郷」というテーマを設定してみました。望郷とは、故郷やそこに住む人を懐かしく思うことですが、そのためには故郷を離れている必要があります。そこで、「移住」というキーワードも一緒に挙げて、考えていくことに致します。中でも、そういうテヘランをある意味で象徴する、町を南北に貫くヴァリーアスル（旧パハラヴィー）大通りに焦点を当てて考えることにします。

まず、現在のテヘランを一言で説明しますと、悩み多いメガシティ、と言えるでしょう。テヘランは、現在の推定人口926万人、本日の他の都市との比較で言うなら、カイロに並ぶ大都市です。平均標高3kmのアルボルズ山脈の南麓の扇状地に発達した町で、平均標高は1200m、南北の高低差が900mあるのが、最大の地理的特色です。夏は高温小雨であり、また、歴史的に水を大規模水利施設であるカナートに依存してきたため、昔から標高の高い町の北部は避暑地として富裕層が所有し、園地や果樹園が広がる

一方、南部には庶民や貧困層が密集して住む、という居住パターンができ、いわゆる南北問題を抱えてきました。

現在のテヘラン: 悩み多いメガシティ

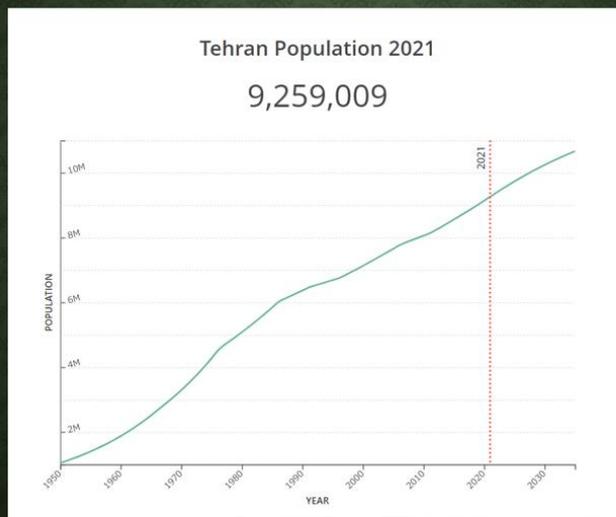
- ・ アルボルズ山脈の山麓に広がる730km²の市域に869万人、人口密度約12,00人。（東京は2021年で15,475人）。
- ・ 平均標高約1200mで、南北の高低差は約900m。これを原因とする南北問題を抱える。
- ・ 交通渋滞、大気汚染、溢れるゴミ、水不足など、インフラが未熟な大都市の典型例。



テヘランのもう一つの特徴は、都市としての歴史が浅く、また、この150年ほどの間に爆発的に拡大し、大きく変貌を遂げたという事実です。

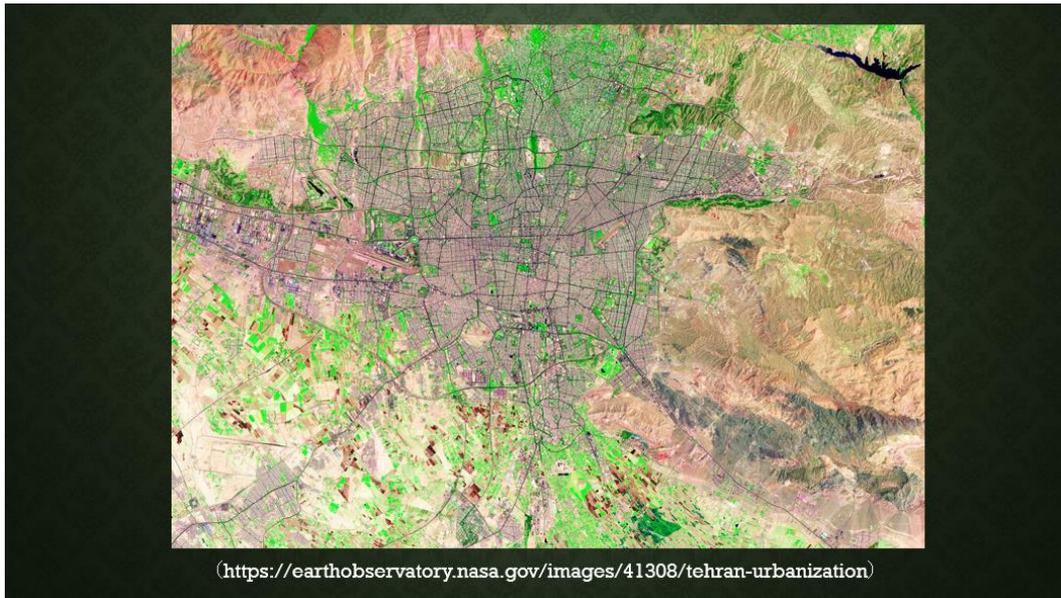
このグラフを見て頂くと、テヘランの人口がほぼ一直線に増加してきたことがわかります。このため、インフラの整備が遅れている途上国のご多分に漏れず、あらゆる深刻な都市問題を抱えています。とくに大気汚染は世界でも最も激しい都市の一つで、南部地域は汚染度も甚だしいものがあります。

テヘランの人口推移



(<https://worldpopulationreview.com/world-cities/tehran-population>)

これは現在のテヘランの衛星写真です。北部は山のギリギリの所まで開発され、西部のキャラジという町、南東部にあるテヘランよりずっと歴史の古いレイの町も呑み込んで、水の少ない南部にもニュータウンが建設されています。因みに、テヘランにはニュータウンが計画も含めて20程度あり、人口の分散が図られています。



小説に絡めて申しまして、テヘランを題名に持つ作品には、負のイメージが拭いきれません。例えば近年の作品をご覧ください。左は、『空のない町テヘラン』ですし、『私の夫の名はテヘラン』という右の作品では、「テヘラン」の妻と思しき表紙の女性は地味なヒジャーブで個性を奪われ、顔ものっぺらぼうなのです。



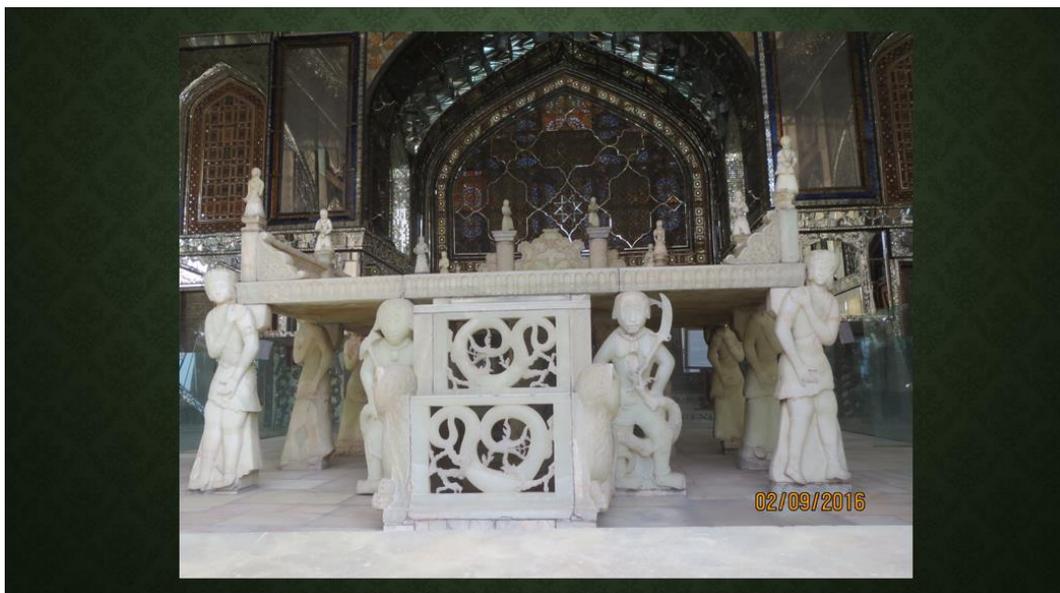
さて、歴史が浅い、と申しましたが、これから早速で、テヘランの町の変遷を見ていきましょう。これは、現在のテヘランに、以前あった城壁を重ねてみた地図です。ここでは、サファヴィー朝のタハマスプー世の頃に作られた城壁を第一城壁、ガージャール朝のナーセロッディーンシャーがそれを壊して作った城壁を第二城壁と仮に呼ぶことにします。



第一城壁内は、王城とバーザール地区の他に三つの街区を持つだけの広さ約 3.8 km²の町で、1798 年にガージャール朝の首都に選ばれてから半世紀が経過しても、人口は精々2万人程度だったと言われていました。市域内にも緑地が見えますが、城壁の外部には樹園地や果樹園が多く、とくにザクロが有名だったということです。とくに気候や水に恵まれた城壁の北部には、富裕層の邸宅や外国商館、兵舎、病院などが増えていきました。

しかし、19世紀後半になるとさすがに城壁内が手狭になったため、ナーセロッディーンシャーの命で旧城壁を壊して市域を拡張する工事が1869年から始まりました。こうして土塁の城壁が築かれ、首都から各地に通じる美しい14の城門も作られて、パリを真似たと言われる八角形の新たな市域が誕生したのです。この事業によって市域は約5倍となり、旧城壁の撤去跡などを使って欧州風の広い直線道路、交差点の美しい広場、公共施設や兵営などが作られて、人口も1910年には25万に増加したと推定されています。現在も残る繁華街ラーレザールなども、この時代に整備されたのです。

これは、旧市街にあるゴレスターン宮殿。



UNESCO の世界遺産はイランに 17 ありますが、そのうち唯一テヘランにあるものです。これは有名な鏡の間ですね。



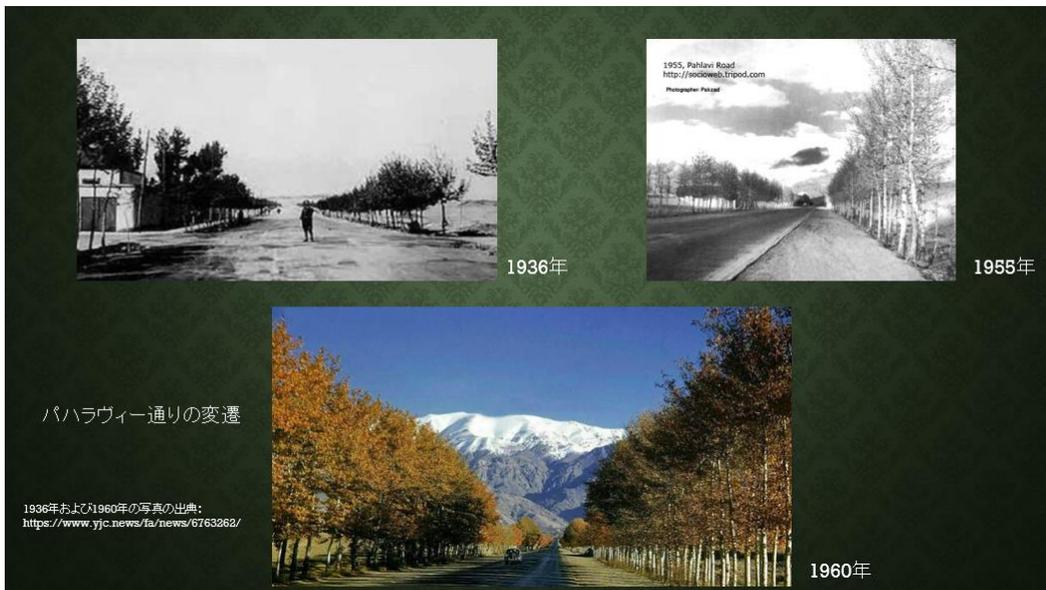
紹介ついでに、テヘランに残るガージャール朝時代の建造物を少しだけご紹介します。これは、ナーセロッディーンシャーが息子のマスウード・ミールザー ゼッロツソルターンの為に建てた館です。これも市の中心部にあります。このような美しい建物は、歴史地区に点在しており、小さな博物館などとして利用されているものには、歴史ある邸宅が多いです。

こちらは、現在のテヘランの北部、シェミーラーンのファルマーニーエという地区にある庭園です。ガージャール朝末期の有力王族ファルマンファルマーの持ち物でしたが、パハラヴィー朝になってレザー・シャーに接收され、その直後の 1940 年にイタリア大使館に譲られて、現在は大使公邸となっています。そういう経緯があったため、相続などで切り売りされることなく元の姿のまま残った数少ない邸宅と庭園です。実は私も行ったことがあるのですが、うっとりするような美しい場所でした。

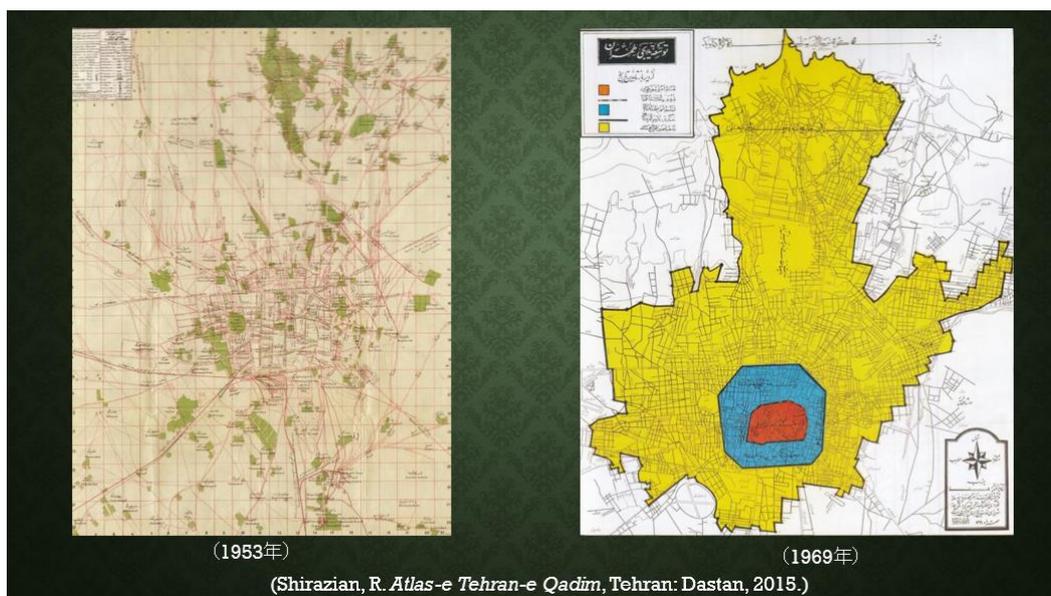
さて、話をテヘランの拡大に戻します。1925 年、ガージャール朝を倒してパハラヴィー朝を興したレザー・シャーは、テヘランの近代化に取りかかります。それは、王権を最大限に発揮した、有無を言わさぬ首都改造でした。第二城壁が解体され、より広くなった市域では、旧王室関連の建物も解体・縮小され、銀行、省庁、軍事施設などが作られました。1930 年代に入ると、道路拡張法によって町の南北、東西を貫く道路が建設され、格子状にゾーン分けされた新たな首都が形作られていきました。

例えば町を南北に貫く旧パハラヴィー通りは、中東一の 18km の長さを誇り、テヘラン南部の鉄道駅とシェミーラーンの中心部タジュリーシュを結んでいます。ここには、街路樹として 18000 本と

言われるスズカケが植樹され、現在も大きく成長した並木が続いています。旧市街にある王宮と、シェミーランにあるサアダーバード宮殿を繋ぐ意図があったというこの道路は、当初王室専用道路だったそうです。



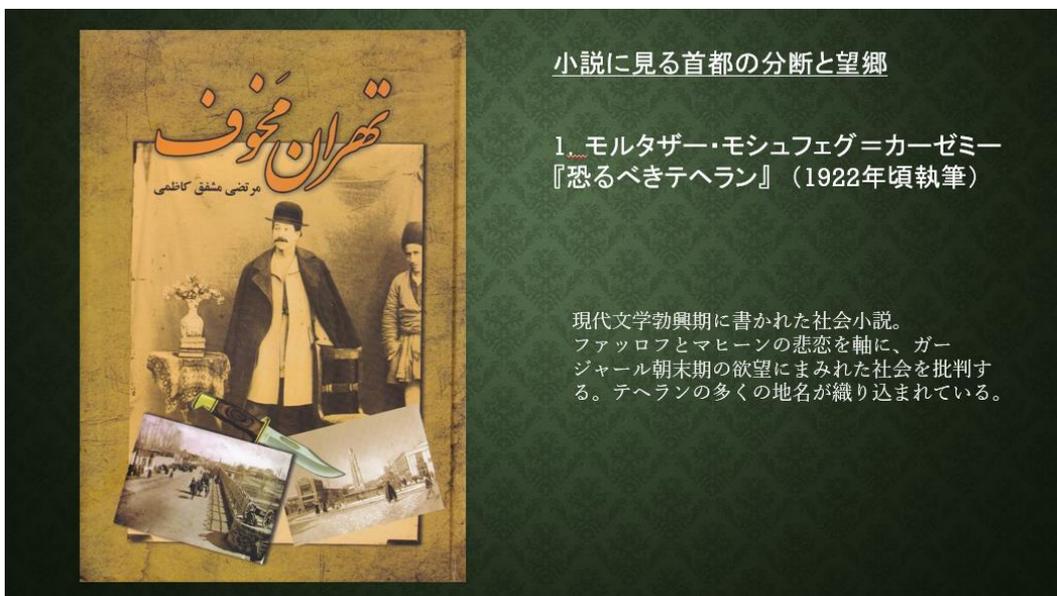
第二次世界大戦後のモハンマド・レザー・シャーの時代になると、テヘランの肥大化はますます進んでいきました。1948年、社会経済の理想的な発展を目指す企画庁が発足し、米国の顧問団と共にテヘラン開発の長期計画が練られますが、民間ベースで急速に進む開発を役所がコントロールすることは、実際には難しかったようです。左側の地図は、少しわかりにくいですが1950年代に旧市街を中心とする地域がどんどん広がっていき、北側のシェミーラン地域と複数の道路で繋がってきた上、その途中の多くの地区にも居住区域が広がってきたことがわかります。北へ行けば行くほど裕福な住民が多い、という南北問題も、拡大こそすれ収まることはありませんでした。右側、1960年台終わりには、北向きだけでなく東西方向にも町が広がってきているのが確認できます。



その後、1979年のイスラーム革命の混乱、テヘランにも空爆が繰り返された1980年代の対イラク戦争などを経て、テヘランへの人口集中はとめどなく続き、先ほどもご覧に入れた現在のテヘランとなっています。

ここでやっと小説の話題に辿り着くわけですが、まず、現代文学の始まりの頃の作品をご紹介します。

この『恐るべきテヘラン』は、新聞の連載小説として発表された社会小説で、ガージャール朝末期のテヘランを舞台に、良家の子息ファッロフと成り上がり者の金満家の娘マヒーンの悲恋が描かれます。イランの語り物の伝統を継承しつつ、『モンテクリスト伯』のような欧州文学の翻訳との影響も受けた作品で、現代文学が標榜する社会批判を前面に押し出した小説です。賄賂が横行し、出世のためには妻をさえ有力者に捧げる役人、生きるために売春宿に売られた女たちの身の上話など、20世紀初めの欲望にまみれたテヘランを「恐ろしい町」として描いています。

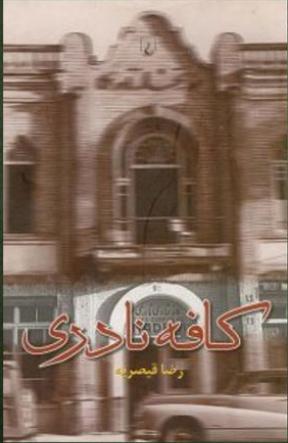


例えば冒頭場面は、旧市街南東部のチャール広場ですが、ここは犯罪者の巢窟で、茶店には阿片やタバコの匂いが充満している、という物騒な一角です。それに対し、ファッロフとマヒーンが幼なじみとして過ごした「北部の庭園」は、静謐で平和な空間なのですが、それを満喫できるのが一握りの有力者のみであることも強調されます。小説内には、テヘランの地名が数多く登場して、1920年代の状況を知る縁とすることができます。

古いテヘランのランドマークを題名にした有名な作品をもう一つご紹介しましょう。ナーデリー・カフェという作品で、これは第二城壁時代に整備された繁華街に開店して、多くの知識人が集まったことでも知られるカフェなのです。かつての賑わいはありませんが、現在も細々と営業していて、大作家のサーデグ・ヘダーヤトの定席も見学できます。

ただ、カフェ自体が物語の中で大きな役割を果たしているわけではなく、パハラヴィー朝を生き

た知識人たちのノスタルジーを誘う存在として機能していると思います。

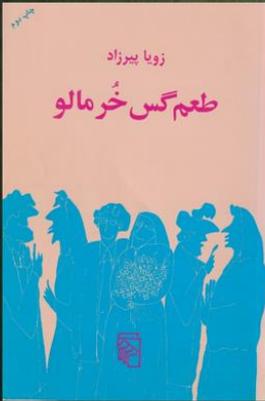


2. レザー・ゲイサリーエ
『ナーデリー・カフェ』(2003年)

ナーデリー・カフェで見かけた旧知の人物をきっかけに、パハラヴィー朝時代にテヘランで、またパリやローマで暮らした知識人や芸術家の運命を革命後まで辿る。

さて、あまり時間が残っていませんが、ここからが本題です。旧パハラヴィー通りに絡めて、テヘランの町と深く関わる短編小説を二編、ご紹介します。どちらも拙訳ながら翻訳がありますので、興味を持って頂けたらどんな作品か確かめて頂けます。(『天空の家 イラン女性作家選』(段々社、2014年) および『中東現代文学選 2021』(中東現代文学研究会、2022年刊行予定)

3. ゾヤ・ピールザード「ハーモニカ」(1997年)



短編集『柿の渋み』

まずは、ゾヤ・ピールザードの「ハーモニカ」です。

物語は、テヘランの北の端ヴェレンジャク地区にあるチェロウキャバレー屋から始まります。ヴェレンジャクは、近年開発が進んで富裕層が住み始めたため、山との境界地域にありながら、モダンな都会の様相を示しています。主人公はハサンというこの料理店の経営者で、共同経営者のキャマーリーが妻子を連れてアメリカに移住すべきかどうか迷っていることを心配しています。ひどい雪の晩で客もいないので、ハサンは母親の待つ下町のモニーリーエに帰ろうと坂道を下っていき

ます。

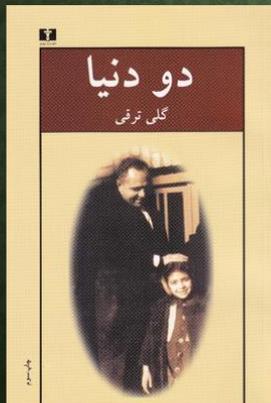
途中で雪にはまった小型トラックの運転手と知り合いになり、トラックに乗せてもらってヴァリアスル通りを下っていきます。その間に、ハサンとキャマーリーの間柄が説明されます。二人の共通の趣味である釣り場で出会い、すっかり意気投合した二人は、一緒にヴェレンジャクで料理店を開き、繁盛します。二人とも暢気な独り者だったのですが、キャマーリーが若い妻を娶って以来すっかり骨抜きにされて、二人の関係は微妙に変わっていきます。そこに米国でレストランを営んでいるという男が現れ、アメリカンドリームを吹き込まれたキャマーリー一家は、カリフォルニアに移住してしまいます。タイトルの「ハーモニカ」は、二人の釣り場での出会いのきっかけともなった小道具ですが、キャマーリーが企画庁に勤めていた時代にアメリカ人顧問からもらったもの、という設定で、キャマーリーが渡米する際、ハサンに譲られます。

この物語を訳した時には、あまり深く考えなかったのですが、今回、テヘランの町の成り立ちを調べた後で色々なことに気づきました。ハサンの帰宅経路を地図上に描いてみますと、シェミーランと旧市街を結ぶ線が描けます。下町に住むハサンが車もなしに毎日15キロ以上の距離を往復する、という設定には少し無理がありますが、ここでもテヘランの南北問題が意識されていることがわかります。テヘランの都市計画を策定して、成功することはなかった企画庁に勤めていたキャマーリーは、中産階級らしく中間地域のサバー庭園に家を構えています。

金持ちの住むお洒落な町で店を開き、南北を結ぶ道に沿って行き来したものの、最終的に中途半端な中産階級のキャマーリーはテヘランに留まることができません。そして、物語の終わりに、一人で釣りに出かけて、キャマーリーのハーモニカを吹こうとしたハサンは、母親に、自宅の庭にある便所の修理があるから帰ってくるように、と頼まれていたことを思い出します。ハーモニカは、西洋の、もっと言えばアメリカ文化の象徴と読み取ることも可能でしょう。そして、ハサンはそれがうまく吹けず、結局旧市街の伝統的な暮らしに戻っていく。そのように読むことができると思うのです。

続いてご紹介するのは、ゴリー・タラッキーの「父」です。フィクションとはいえ、タラッキーは自分の子供時代の思い出に基づく小説を多く書いており、この作品もその一つと言えます。彼女自身は、革命後フランスに移住しましたが、現在もしばしばイランに帰国し、作品は基本的にペルシア語で書いてイランで発表しています。

4. ゴリー・タラッキー「父」(2002年)



短編集『二つの世界』



1940年代後半から50年代前半のテヘラン。ゴムから単身上京し、一代で財を成した父は、シェミーラーンのパハラヴィー通り沿いに念願の邸宅を建てます。父はユニークな人で、ある日「英語の先生」だと言って乞食同然のインド人ガズニーを連れてきます。権威ある父に守られながらガズニー先生と楽しく過ごし、この幸せが永遠に続く気がしていた「私」ですが、ガズニー先生の病気と死去に続いて、鋼鉄のように強いと自負していた父が病に倒れます。父は欧州で治療を受け、二度の復活を遂げますが、最後には亡くなってしまいます。そして、父の庇護の象徴だった邸宅は町の区画整理のために取り壊され、長年仕えてきた料理人のハサン・アーガーら使用人も解雇されるのですが、そのハサン・アーガーは、後年、イスラーム革命が勃発した時に「私」の家族を訴えて、母を困惑させます。そして、革命の熱も冷めたある年、「私」は元の邸宅があった場所を通りかかって、偶然ハサン・アーガーを見かけます。一瞬交わした視線の中で、昔を懐かしむ思いが交錯しますが、言葉を交わすこともなく二人は別れていきます。

この短編の中でも、南北問題は、シェミーラーンの家とガズニー先生の家との対照的な表現や、終盤の料理人ハサン・アーガーとの後年のエピソードでほろ苦く描かれます。

さて、最初に申しましたように、望郷とは遠くから故郷を思うこと、というのが定義です。テヘランを舞台にした小説の「望郷の念」として私が挙げたいのが、地方出身者の故郷への思いでないことは、これまで見た例からも明らかでしょう。それよりも圧倒的に多いのが、テヘランに住む登場人物の海外への移住にまつわる望郷の念です。『ナーデリー・カフェ』は、外国在住のはずの人物がカフェに現れたことがきっかけで、テヘランでの昔の生活や人間関係を思い起こす、という設定ですし、「父」の語り手も、これは同じ作家の他の作品から推測されるのですが、外国に住んでいて、子供時代の出来事を懐かしく回想しています。また、「ハーモニカ」で米国に移住したキャマーリーは、将来テヘランでの暮らしを懐かしがるに違いない人物として造形されています。

そこには、20世紀のイランの政治、社会の目まぐるしい変化、とくに近年のイスラーム革命の影響で、ディアスポラとなるイラン人の流れが絶えない、という事実があります。「恐るべき」、「空の

ない町」に対して愛憎相半ばする思いを抱きながら、テヘランにまつわる人々を描く。多くの作家にそんな物語を紡がせるイランの現実、今も厳しさを増すばかりです。

私の報告はここまでに致します。どうも有り難うございました。

司会：藤元さん、ありがとうございました。歴史と小説を重ねて、テヘランという町を眺めると何が見えてくるかというお話、本当に興味深く伺いました。また、テヘランをめぐる、あるいはテヘランにいる人々の「望郷」の切ない思いが伝わってきました。

最後のご講演者は白杵陽さんです。日本女子大学文学部史学科教授、大学図書館長で、専門はパレスチナ/イスラエル近現代史、そして日本・中東関係史です。著書は『日本人にとってエルサレムとは何かー聖地巡礼の近現代史』、『「中東」の世界史』、『「ユダヤ」の世界史』など多数お持ちです。今日は「聖地エルサレムの春祭りー預言者モーセ廟を巡って」と題してお話しいただきます。

それではよろしく願いいたします。

講演5 「聖地エルサレムの春祭りー預言者モーセ廟を巡って」(白杵陽)

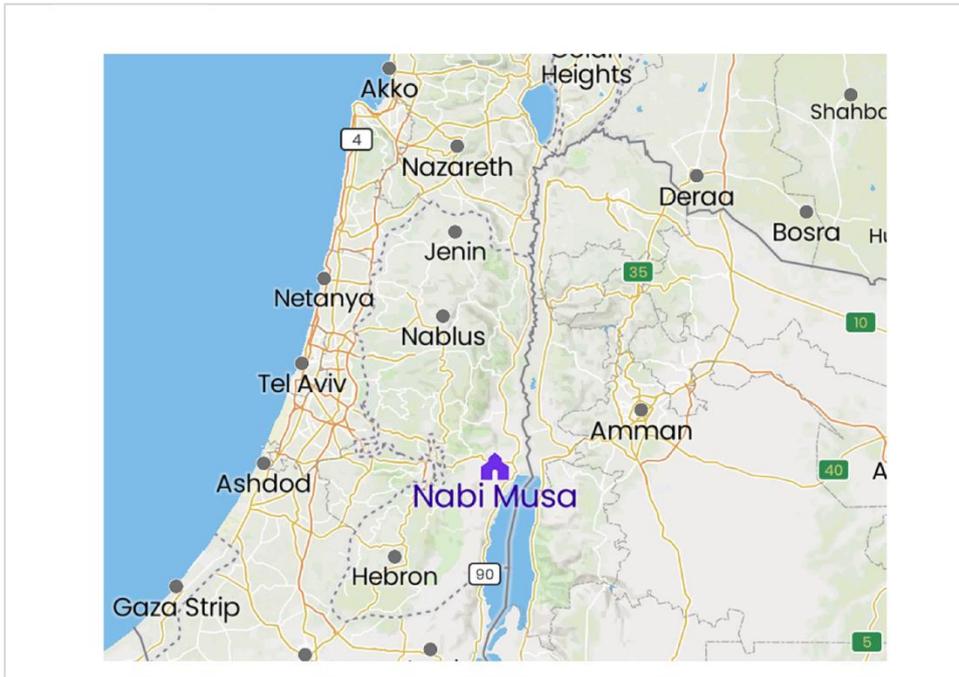
こんにちは。白杵と申します。本日はエルサレムそのものではなく、聖地エルサレムで毎年春に行われていた預言者モーセ(ナビー・ムーサー)廟をご紹介したいと思います。モーセがなくなった場所については、旧約聖書に曖昧な記述がありますが、現在考えられているものは数か所あります。一番有名なものはヨルダン川にあるマウントネボです。

今日お話しするモーセの墓は、エルサレムの人たちが、ここがモーセのお墓だと信じている場所です。私も何度も訪れたことがありますが、その中身がよくわからないものの、毎年春にその墓を参詣することが行われています。最近起こった事件として、この廟の近くで女性DJのアブドウル・ハーディーさんが自身のパフォーマンスを行い、それが不敬だとして逮捕、監禁されたことがニュースになりました。このように最近ではモーセ廟を神聖化する動きが見られます。

本日はナビー・ムーサー廟の場所から始まり、なぜナビー・ムーサー祭りを取り上げるのか。そして、この廟や祭りに関する記述、その起源、祭りの主催者は誰なのかといったこと。あるいはパレスチナにはかつて廟がたくさんありましたが1948年に難民化することによって聖者までもが難民化したという状況があります。なかでも代表的なものはナビー・サーレフとナビー・ルービーンという聖者かと思います。最後に、祭りそのものの話をしまして、現在はどのようになっているのかをお話していきたいと思えます。

ナビー・ムーサー廟の場所は死海の北東部に位置し、エルサレムから自動車でもヨルダン峡谷を下って行って、峡谷そのものに入る手前の右手にあります。観光コースですが、ほとんどの外国人は訪れることはありません。現在はパレスチナの自治区になっていますが、イスラエル軍が駐屯しているため、観光地

として発展していくのはなかなか難しいのではという印象があります。

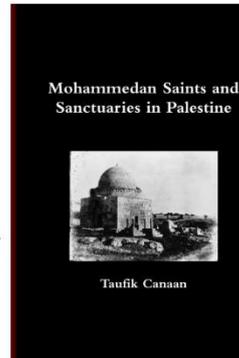


次に、ナビー・ムーサー事件をなぜここで取り上げるのかをお話します。私はもともと委任統治期、つまりイギリスがパレスチナを統一した第一次世界大戦後からイスラエル勧告までのパレスチナの歴史を勉強していましたが、その時に初めてこの事件を知りました。つまり、1920年4月、ナビー・ムーサーの行列にシオニストのユダヤ人が旗を奪おうとしたことがこの事件のきっかけになっています。最初の反英・反シオニスト反乱であり、現代のインティファダの起源と見なすこともできます。その後もパレスチナでは1920年に続き、1921年、1929年、1933年、1936-39年まで、幾度となく民衆反乱が起こっています。こうした背景から、イギリス委任統治政府はしばしばこのナビー・ムーサー祭りを禁止することもありました。1948-67年までのヨルダン統治期には許可されて祭りが行われていたこともありましたが、1967年の第三次中東戦争以降、イスラエルの占領下に入って以降は禁止されました。1993年のオスロ合意後のパレスチナ自治が始まると再び行われるようになりました。

ナビー・ムーサーに関する記述は、アラビア語文献ではあまり見かけません。パレスチナで医師をしていたタウフィック・カナンが、彼自身は民俗学者でもあったので、彼の英語の著作 *Mohammedan Saints and Sanctuaries in Palestine* (1927) で触れているものが、ナビー・ムーサー祭りについての数少ない体系的な記述です。私が所持しているのは、エルサレムに1990-92年に住んでいた時にユダヤ系の古本屋さんを巡っている時に偶然見つけたものです。これはユダヤ系のアリエル出版社が1980年に再版したもので、モロッコ系ユダヤ教徒などマグレブ出身者の聖者崇敬との関連で興味をもたれたのではないかと思います。パレスチナにはかなり多くの聖者廟が以前からありましたが、冒頭で申し上げた通り、パレスチナのアラブの人たちが難民化すると聖者も一緒に難民化した、とパレスチナの人たちはよく冗談で言いますが、実際問題として、廟を管理する人がいなくなって廃墟化、あるいはユダヤ人たちが入植してきて破壊するなどの憂き目に遭うことが多いようです。

ナビー・ムーサー廟・祭りに関する記述

- 民俗学者であり、医師でもあったタウフィーク・カナアン(Tawfiq Cana'an, 1882~1964年)はその著作*Mohammedan Saints and Sanctuaries in Palestine* (1927)において、ナビー・ムーサー廟およびナビー・ムーサー祭りに関して詳しく記述している。
- なお、報告者が所持している同書は、エルサレムにあるユダヤ系のアリエル出版社から1980年に再版されたものである。同書はモロッコ系ユダヤ教徒などマグレブ出身者の聖者崇敬との関連で興味もたれたのだろう。
- パレスチナ地域には数多くの聖者廟があったが、1948年にパレスチナ・アラブ人の多くが難民化すると、「聖者」も一緒に難民になったなどともいわれる。そのため、イスラエル建国後、多くの廟(マカーム)は廃墟と化すか、破壊されたりした。



ナビー・ムーサー祭りの起源はいろいろとされていますが、カナアンの説明によれば、始まったのがサラーフッディーン(サラディン)の時代とされています。この時にサラーフッディーンが政治的に利用するために、つまりこの春祭りはキリスト教徒やユダヤ教徒に対抗するために行われたとされています。いずれにせよこの廟自体が建てられたのはマムルーク朝第5代スルタンのバイバルス(在1260-77年)の時代であるとされています。

ガートルード・ベルという大変有名な女性旅行家が1900年に撮影した祭りの写真があります。これを見てわかりますように、いろんな地域から集まってきた人たちが、それぞれの旗を掲げている様子がわかります。この行列がエルサレムからナビー・ムーサーの廟まで行くことになります。事件が起こった1920年の祭りの様子をおさめた写真も残っています。

G・ベルの撮影した祭り(1900年4月)



http://gertrudebell.ncl.ac.uk/photos_in_album.php?album_id=1&start=190

ナビー・ムーサー祭りにこだわった理由の一つが、エルサレムの名望家であるフサイニー家が主催したことがあります。祭りが始まる時はフサイニー家がエルサレムやその周辺の人々に食事を提供し、エルサレム周辺の町からどんどん参加してくるようになりました。ちなみにハーッジ・アミン・アル・フサイニー（1897-1974）はイギリス委任統治期にイスラーム的な公職（イスラーム最高評議会議長、大ムフティーなど）についていましたが、この人の家が祭りを主催していたことになります。

廟はナビー・ムーサーのみならず、ナビー・サーレフやナビー・ルービーンのものも知られています。

この祭りにおいては岩のドームを出発点とします。そこから北側に進み、英語でライオン・ゲートと呼ばれる（アラビア語ではバーブ・シッティー・マリヤム）門を出ていきます。つまり、非常に特殊なルートをとります。

ナビー・ムーサー祭りは、イスラーム的な祭り（イード）ではなく季節の祭り（マウシム）です。したがって、エルサレムのアル・ハラム・アッ・シャリーフ（ユダヤ教の第二神殿跡）内から出発しますが、アル・アクサー・モスクではなく、岩のドームを起点とします。

祭りの日程は、キリスト教やユダヤ教への対抗という側面があることから、ギリシア正教会のカレンダーに従って行われ、一週間続きます。春祭りとして始まり、キリスト教で言えば復活祭、ユダヤ教で言えばペサハと重なるように設定されたとも言われます。

この祭りには多くの人が参加することになり、各地に聖者廟があり、そこに向かうという形になります。私が昔ヨルダンのアンマーンに住んでいた時にアラビア語を教えてくれていたパレスチナ人の先生が、子供の頃にナビー・ムーサーではなくヤーファー近郊の廟に行っていたという話を聞きました。マウシムはピクニックのような気分だったと言っていたことを思い出しました。

ナビー・ムーサー祭りを見た日本人の作家もいます。それが徳富蘆花です。彼は妻と共に二回目のエルサレム訪問を、第一次世界大戦が終わった直後に行いました。その時彼がいたホテルがジャッファ門（Jaffa Gate アラビア語名はバーブ・アル・ハリール、すなわち「ヘブロン門」）の近くだったので、ヘブロンからの巡礼者たちがその前を通ったのだと考えられます。蘆花の記述からは、杖を持って先導する長老がいて、それに合わせるような形で音楽が演奏され、それぞれワーリーを象徴する旗が何本も立っている。大変にぎやかな行列であることを記しています。

最後に現在のナビー・ムーサー祭りについてお話します。私がエルサレムに滞在していた1990-92年、祭りは行われておりませんでした。ですが最近では復活しており、インターネット上では写真などがあがっていてその様子を伺うことができます。

以上で私の話を終えたいと思います。どうもありがとうございました。

司会：臼杵さん、ありがとうございました。ナビー・ムーサー祭りの様子を生き生きとお話してくださいました。ご紹介いただいた徳富蘆花の『日本から日本へ』もそうですが、日本人旅行者の中東紀行文学を図書館で見たことがあります。こうしたものも、この機会に読んでみたいと思いました。

最後に日本中東学会会長、日本エネルギー経済研究所理事、中東研究センター長の保坂修司さんに閉会の言葉をいただきたく、保坂会長、よろしく願いいたします。

閉会の言葉（保坂修司）

みなさん、こんばんは。ただいまご紹介にあずかりました日本中東学会会長の保坂と申します。閉会に際し、一言ご挨拶させていただきます。

本日は、お忙しいなか、日本中東学会公開講演会にご参加いただき、どうもありがとうございました。また、発表者のかたがたにも、すばらしい講演をいただき、あつく御礼申し上げます。

新型コロナウイルスのために、今年の公開講演会もオンラインでの開催となりました。参加していただいた、みなさんと直接、顔を合わせることができず、まことに残念でした。とはいえ、オンラインということで、ふだんであれば、参加できないような遠いところからも参加いただけるようになったのは、大きな利点といえるかもしれません。今後はオンライン・オンサイト双方の利点を生かしたハイブリッド形式も検討しながら、ますます多くのかたに中東という地域に関心をもってもらえるようになればと考えております。

さて、今回の公開講演会は、「中東の都市探訪—歴史と文学から」というタイトルで行われました。

ご承知のとおり、中東も新型コロナウイルス感染拡大で多くの国がロックダウンなど厳しい措置をとってきました。ようやく最近、規制が解除されつつありますが、まだまだ自由に渡航できる状況ではありません。そのなかで今回の講演会では中東を代表する都市であるカイロ、バグダード、イスタンブール、テ

ヘラン、エルサレムの5都市でした。

私の専門はペルシア湾岸という地域なのですが、残念ながらその地域の都市は今回の探訪の対象にはなりません。ただ、カイロとバグダードには短い期間ではありますが、住んだ経験があります。また、イスタンブル、テヘラン、エルサレムも観光や出張などで訪問した経験があります。その意味でお話をうかがいながら、懐かしく感じたり、また短期間の訪問では知りえない貴重な情報を得たりすることもできました。

最初の熊倉さんのお話では、古いカイロのカラーウーン寄進施設が紹介されました。単に写真が美しいというだけでなく、VRを利用した、新しい研究の方向性を示し、日本の中東研究のレベルの高さを表しているといえるでしょう。今、エジプトは新首都を建設し、政府関係施設を中心にそこへの移転が進んでいます。私がカイロに住んでいたのはもう20年もまえですが、人も車も溢れかえり、大気汚染もひどく、正直、住むのもたいへんだったんですが、ポスト・コロナのカイロがどのように変わっていくのか、たいへん楽しみになりました。

2番目の柳谷さんのバグダードの話。実は私も、たいへんミーハーですが、「バグダードのフランケンシュタイン」がアラブのブッカー賞を受賞してすぐに購入しました。というのも、私はバグダードには30年ほどまえにわずか4か月という短い期間ですが、住んでいた経験があります。

当時、私はイラクの隣国クウェートに住んでいたのですが、イラク軍がクウェートを占領したため、クウェートに住んでいた、日本人を含む多くの外国人がイラクに連れていかれました。私もバグダードに移動し、いわゆる人質、イラク側からいわせれば、「ゲスト」として、約4か月間、そこで過ごしました。

当時はサッダーム・フセインの独裁政権下であり、人びとは毎日、恐怖を感じながら生活しました。そのころとは少し異なりますが、バグダードのフランケンシュタインの小説で描かれた、テロが頻発するバグダードの町も「恐怖」というキーワードで理解できるのかもしれない。

残念ながら、新型コロナウイルスが収束してもバグダードに観光に行くのはむずかしいでしょう。しかし、今日の発表を聞いて、ぜひみなさんには、バグダードの現状、あるいはイラクの現状について知っていただければと思います。

さて、そのつぎは澤井さんのイスタンブルです。イスタンブルには何度もいく機会があったのですが、そのたびに新しい発見がありました。はじめてイスタンブルにいったときは、それこそ、現代のバグダードと同様、テロが頻発し、町は汚れ放題という感じでした。それはそれで楽しいところではあったんですが、その後はいくたびに町がきれいになり、おしゃれな店やレストランができたりと、日々変化しつづけているのを実感できました。

コンスタンティノープル以来、現在に至るまでつねに変化しつづけるというのはダイナミックなイスタンブルのすごさの現れではないかと思います。

澤井さんの軽妙な語り口もあり、今晚の夕食はケバブとラクにしようかと思ったかたも多いのではないのでしょうか。

つづいて藤元さんのテヘランです。私はテヘランには一度しかいったことがありません。イランと対立している国を専門にしていることから、なかなかイランに行くのはハードルが高かったということもあります。個人的には、カイロでもそうでしたが、大気汚染のひどさには驚かされました。もう一つ、カイロとの類似点でいうと、藤元さんが有名な作家のサーデグ・ヘダーヤトの定席を紹介されていましたが、カイロのカフェにも、ナギーブ・マフフーズの通ったところなんかがあり、テヘランもカイロもそれぞれの国の知的な中心地であったことがうかがわれました。

藤元さんは、柳谷さんのバグダードの話と同様、小説に描かれたテヘランを紹介しました。当たり前ですが、町といっても、さまざまな顔があり、テヘランも例外ではありません。高級住宅街や貧民街、さらにはニュータウン。また、そこに住む人たちの出自によって町の印象や見かたが変わってくるのも、おそらく他のさまざまな都市と同じでしょう。イランはまだまだ新型コロナウイルス感染拡大がつづいており、いつ規制が解除されるかはわかりません。しかし、いずれそのときまでに、紹介された小説などで予行演習をしておくというのも一興でしょう。

最後は臼杵さんのエルサレムの話でした。エルサレムも、私は一度しかいったことがありませんが、この町は、私が中東で旅したなかで、もっとも印象に残る場所の一つだったと思います。残念ながら、臼杵さんが紹介されたマカーム・ナビー・ムーサー廟に行く機会はありませんでしたし、不勉強ながら、その名前すら聞いたことがありませんでした。ちなみに、ご存じのかたもいらっしゃるかもしれませんが、実は日本の石川県羽咋市にもモーセのお墓とされる場所があり、私は実はこちらにはいったことがあります。さらに青森にはキリストの墓（と称される）ものもあり、私はここにも何度か訪ねております。

もちろん、これらはトンデモ説にすぎません。しかし、臼杵さんの紹介されたナビー・ムーサーは、現代にまでつづくパレスチナ問題にも直接的にかかわっており、きわめて重要な政治的・宗教的・文化的背景があることがわかりました。今後、エルサレムに行く機会があれば、ぜひ訪問したいと思います。

さて、今回の公開講演会では、コロナ禍のもと、中東に行くのが困難になるなか、みなさんに少しでも中東の都市の美しさ、楽しさ、歴史や現状について、いやそういうポジティブなところだけでなく、血なまぐささ、苦しさ、厳しさなどネガティブな側面も、なるべく生き生きとしたかたちでお伝えするのを目的としておりました。各発表者のすばらしいプレゼンテーションだけでなく、質疑応答ではフロアから非常に突っ込んだ具体的、かつ専門的な質問も出て、発表者と参加者のあいだで活発な議論が展開されました。その意味でも、この公開講演会の目的はおおむね達成できたと信じております。今後、これらの都市を訪れる機会があれば、ぜひ、今日の話をおい起こしていただければと存じます。発表者の熊倉さん、柳谷さん、澤井さん、藤元さん、そして臼杵さん、興味深く、また充実した発表、どうもありがとうございました。

また、担当理事の粕谷さん、後藤さん、そして運営をお手伝いいただいた皆さん、さらに共催の科研費基盤研究「イスラーム・ジェンダー観の構築のための基礎的総合的研究」に関係するかたがたにもあらためて感謝の意を表明することで、わたくしの閉会の言葉とさせていただきます。本日は、みなさま、日本中東学会公開講演会にご参加いただきまことにありがとうございました。この講演会がみなさまの中東理解の一助になることを願ってやみません。

司会：保坂会長、どうもありがとうございました。以上で閉会となります。皆さん、ご講演者の方々に、大きな拍手をお願いいたします。本日はご参加くださりまして、ありがとうございました。

以上

作成：日本中東学会公開講演会担当・IG 科研事務局